

研究所報

2019年1月 No.158

学校における 業務改善の見直し・改善のヒント集

家庭訪問を見直す
2分の1成人式を考える
OJTとミニ研修の意義と可能性
学級経営参考資料をめぐって
地区全体で教育活動を見直す



静岡県教職員組合立教育研究所
調査研究委員会

目 次

巻頭言	「業務の改善に必要な合意形成のために」	2
-----	---------------------	---

共同研究者) 静岡大学社会科学部教授
荻野 達史

I	調査研究の概要	4
---	---------	---

1	調査研究の経緯	4
2	調査研究の目的	4
3	調査研究の内容と方法	5
	(1) 内容	
	(2) 方法	

II	研究の概要	6
----	-------	---

III	インタビューによる調査研究	8
-----	---------------	---

○家庭訪問を見直す	8
○2分の1成人式を考える	18
○現場に合ったOJTとミニ研修を	24
○学級経営参考資料をめくって	30
○地区全体で教育活動を見直す	36

上の5つのテーマについては、すべて

- 1 現状と課題
- 2 研究の概要
- 3 考察と提案

という項立てで構成されています。

IV	まとめ	43
----	-----	----

「業務の改善に必要な合意形成のために」

共同研究者) 静岡大学人文社会科学部教授 荻野達史



多忙や過重労働に苦しむ学校現場で、いかにして業務の見直しを図るのか、そのための合意をどのように作り上げるのか、そして多忙ななかでも出来ることとはなにか。この度の調査は、こうしたことを調べるために、教職員としての経験も長く、そして多くは静教組の支部長も務める調査研究委員会の所員たちが、自ら地域の学校に足を運び、多くの教職員や関係者にインタビューを行ったものです。まさにこの時期に必要とされる、必ずや皆様に参考にしていただける情報を集め、まとめたものです。以下、現在の動向と合わせ、本調査の主旨や意義について紹介をさせていただきます。

ちょうどこの原稿を書き始めたとき、中央教育審議会の「学校における働き方改革特別部会」が答申素案をまとめたニュースメールが入りました。この特別部会は2017年6月に発足しましたが、学校現場の労働状況を総体的に改善すべきものとして、政策的な検討が行われるまでには実に長い時間がかかったように思います。この素案で注目されることの一つに学校業務の「仕分け」があります。負担を軽減するという視点から、これまで多くはもっぱら教員が担ってきた業務を大きく3つに分類して示しています。「基本的には学校以外が担うべき業務」「学校の業務だが必ずしも教師が担う必要のない業務」「教師の業務だが、負担軽減が可能な業務」ということになります。加えて「そもそもの必要性が低下し、慣習的に行われている業務は、…思い切って廃止していくことが求められる」とも記しています。

こうしたことは、個々の学校のレベルでは、「業務の精選」として繰り返し語られてきたことと思います。しかし、このことが「精選」と一言で片づくようなものではないことは、実際に学校現場を経験してきた教員にとっては、おそらく周知のことであり、「言うは易し」という言葉も多々脳裏に浮かんだものと思います。

たとえば、素案が公表される少し前、ある新聞の社説は、中学で6割、小学校で3割の教職員が過労死ラインの月80時間を超す残業をしている。教職員の健康を守り、授業を充実させるためにも「むだな仕事」を削らなければならない、と述べています。学校現場に配慮した意見ではありまじょうが、ある業務を「むだ」と言い切ることがどれほど難しいか、その点もよくよく踏まえた提案であって欲しい、そう思いながら読んだ教職員も実は多かったのではないのでしょうか。実は、このように私自身が思うようになったのは、2017年の春、この調査を企画し始めたとき、調査委員会の所員たちの議論を繰り返し聞くようになってからです。

「教職員の多忙・長時間労働」をテーマとすることは早々に決まりました。その次に、では具体的になにをどう調べるのか。労働時間や日々の業務の概要、あるいは働き方についての課題意識といったことについては、文科省や連合総研によって既に計量的な調査が本格的になされていました。そこで、業務軽減のために学校でなされていることについて、量的でなく質的な、とくにインタビューを用いた調査を行ってみることにしました。定量的なアンケート調査ではなく、定性的な調査を主とするのは40年を超える教育研究所の調査でも始めてのことです。基本的には、「モデル」となるようなとりくみについて十分な聞き取りができれば、それなりの研究になるのではないかと。それは私の浅はかに過ぎる考えでした。所員たちがときにユーモアを交えながら、しかし厳しく指摘したのは、たとえば、

「こうした行事を思い切ってやめました」という事例を探してきて、「だから皆さんもやめてみてはいかがでしょうか」といった話は、現場では通用しない、ということでした。

その理由は、こういうことではないかと思います。対生徒にせよ、対保護者にせよ、学校で時間をかけてとりくんできたことには、当然のことながら様々な意味がある。誰に対しても一律な結果が得られるわけではないが、教職員の実感としてそこに一定の意味を見出してきた経験は否定できない。また、そこにどのような意味や機能があるのかについて、教職員や関係者の集団において一律の評価が存在するわけでは決してない。多忙に喘ぎながらも、何かをやめたり簡略化したりすることには、一定の痛みも存在する。まず、そうしたことを踏まえなければならない。そして、だからこそ慎重な議論や手続きを踏まえて合意を形成する、その過程自体を重視しなければならない。また、そのためには、ただやめる、ただ簡略化するのではなく、それがそれまで果たしてきた機能を考慮して、なんらかの補完的な方法も検討・提案されなければならない。こうしたことが、単純な「お手本」研究では、現場で真摯に耳を傾けられるものにはなり得ない理由として、企画段階で議論されました。

こうした方向性をその都度確認しながら、聞き取りの対象となるトピックを、まず3つの領域に分けて選ぶことにしました。第一に、児童生徒に対して行っている、とくに教育行事。第二に、保護者に向けて行っている行事。第三に、教職員に対して行う事柄です。さらに具体的には、教育行事については、「2分の1成人式」と地区単位で行っている「各種運動大会・音楽会」を選びました。後者は、とくに一つの学校では決定できない行事について、その検討手続きが参考になる事例を取り上げています。対保護者の行事としては、既に様々な対応が模索されている「家庭訪問」を検討しました。対教職員については、授業作りのための「ミニ研修」と「学級経営参考資料」に注目しました。多忙と年齢構成の偏りから、若手の育成が難しいという状況を踏まえての選択でした。

そして、これらのトピックについて、対象校を選び、聞き取りを行い、報告書をまとめて行く過程で常に我々が重視したのは、結果としてやめた、あるいは軽減できたということではなく、教職員自らが反省的に検討した過程であり、そのときの声であり、一定の判断を下した後も考えていることです。ですから、対象校の選定についていえば、ある行事について、意識的にやめた学校／続けている学校、どちらも取り上げました。同じ観点から、一度はやめたが、やはり再開したというところなどはとても重要な意味をもっています。また、ある行事についての評価についても、地域や学校における賛成／反対、どちらも常に「両論併記」であることを旨としました。

調査研究委員会として意図したのは、結果が決められた議論のためではなく、いわば“開かれた議論”のための素材を提供することです。まずはそれぞれの場で、報告された「語り」について感想を交わし合うような形で活用して頂けましたら嬉しい限りです。そして、最後に、多忙を極める業務を縫って再三聞き取り調査を行い、原稿をまとめてくれました所員たちにこの場を借りて感謝を伝えたいと思います。ありがとうございました。

I 調査研究の概要

(1) 調査研究の経緯

職員室の扉を開ける。もちろん、校舎内に子どもたちの声はない。今日は、土曜日の朝、ここのところ、土曜日に学校へ出てくることが習慣になっている。机上のパソコンを立ち上げながら、(何が自分をそうさせているのか)と考えてしまう。昨日のことを振り返ってみる。

朝5時、私は家で机に向かっていて。昨日、子どもたちに書かせたノートに目を通し、今日の授業の準備をするためだ。…略…。子どもが課題と出会う喜び、追求してわかる喜び、力をつけていく喜び、つけた力を生かしてさらに学びをすすめる喜び、そんな喜びに満ちた授業をしたい。私がめざす授業像である。そう考えると、いくら時間があっても足りない。もっと時間が欲しい。

…略…

午後9時すぎ。仕事はまだ残っているが職員室を後にする。提出物、研修の書類等の作成、教材研究は家での仕事だ。帰宅後、11時過ぎから仕事を始める。(寝てはいけない。やらないと月曜日の授業が…)と思いつつも意識を失うように眠ってしまった。

そして今日土曜日。子どもの作品にコメントを入れ、月曜日の授業の準備をし、気になっていた学級園の手入れをしていたら夕方になっていた。土曜日なのに、また一日学校にいてしまった。

45歳男性小学校男性教員 教職経験16年 学年主任

これは、2006年6月、当教育研究所がまとめた「教員の一日」報告書に載せられたものです。これを読み、(私もそういうことがある)(ほんと、時間が足りない)と共感される先生方が多いかと思います。この報告書には、これと同様の内容の報告が多く掲載されています。それは、多忙を極めるという言い方もありますが、「身を削って」というほうが当たっているように思います。

この報告書が出されて10年、2016年文部科学省より「公立小中学校教員の勤務実態調査」の結果が公開されました。それによりますと、小学校教員1日当たりの勤務時間は11時間15分、中学校教員1日当たりの勤務時間は11時間32分となっています。小学校教員は1日当たり3時間30分、中学校教員1日当たり3時間47分の時間外勤務をしているということです。厚生労働省は、過労死ライン(※)というものを定めていますが、この過労死ラインを越えて働いている割合は、小学校教員のうち約35%、中学校教員のうち約60%という現状です。

※厚生労働省は、脳や心臓疾患による過労死の労災認定基準として、発症前1か月間に約100時間、または発症前2～6か月間に1か月あたり約80時間を超える時間外労働(残業)があった場合に、過労死の危険性が高まり、業務と発症との関連性が強いとしている。

教職員の長時間勤務については、2016年度以降、様々な機関等が話題として取り上げるようになりました。具体的には、日本教職員組合は「学校現場にも働き方改革の風を」というタイトルのリーフレットを発行し、長時間労働は正キャンペーンを打っています。また、連合総研(公益社団法人連合総合生活開発研究所が正式名称)は、「日本における教職員の働き方・労働時間の実態に関する研究委員会報告書」を出し、先生方の労働時間は異常だと問題点を指摘しています。マスコミや労働問題の専門家たちも、同様の指摘をしています。

次期学習指導要領の完全実施を目前に控え、今まで以上に学校現場の労働時間が増大することが予想されます。先生方の勤務時間は現状でさえ大変厳しい状況にあり、これは看過できるものではありません。

そこで、当調査研究委員会では、先生方の長時間勤務の改善に向けてさまざまな角度からのアプローチを模索し、結果として、ここ数年学校現場で行われている学校の行事等を中心に教育活動の改善、見直しの議論の内容、経過や実態を明らかにすることとしました。

(2) 調査研究の目的

各学校で実際に行われている教育活動の改善・見直しの議論やその経過を把握し、さまざまな教育活動について、教育的効果と教職員の業務負担、勤務時間との関係性や教職員の考え方等を考察し、今後の教育活動の改善・見直しのための資料提供と一定の提案を行うため。

(3) 調査研究の内容と方法

① 内容

教育活動の改善、見直しについて、具体的に何に焦点を当てるかを話し合い、次の5つに絞り込みました。

・家庭訪問

家庭訪問は、学校では年度当初の恒例行事となっていますが、最近では、希望制にする、面談に替えるなど、さまざまな形で行われています。また、家庭訪問は実施しないという学校もあります。一昔前は当たり前のように行われていた家庭訪問が変わってきているという現状について、議論の内容やその経過を調査しました。

・2分の1成人式

正確なデータはありませんが、県内の多くの小学校では2分の1成人式が行われていると思われます。この行事は、2000年代から全国の多くの小学校でキャリア教育の一環として、実施されるようになりました。一方、この行事については、人権という視点から、教育的価値を問い直す議論があります。

ある地区では、この行事について教育的効果と業務負担の両面から改善・見直しをすすめています。実際にこの行事に関わった教職員の考え方等や議論の経過を調査しました。

・OJT研修とミニ研修

学校では、研修の時間の確保が難しく、週に1回定期的に研修や会議等を設定することすら厳しいという状況ではないでしょうか。そこで、学校現場では、日常的な勤務の中で、仕事をすすめながら研修し、力量アップを図るというOJT研修とミニ研修が行われるようになりました。県内にはこのことに先進的にとりくむ地域があるのでその実態を調査しました。

・学級経営参考資料

教職経験の少ない教員、人事異動により新しい学校での勤務を始められた先生にとって、年度初めは多忙を極めるとともに、何から始めたらいいかという不安になります。

ある地区では、年度初めの業務を詳細にわたってまとめたマニュアルを、「学級経営参考資料」として活用しています。その活用実態や効果等について調査しました。

・地区全体の教育活動

各地区では、教職員の教科研究を推進したり、子どもたちの運動や文化面での奨励を図る行事を開催したりしています。こうしたとりくみは、先人の知恵と努力によるものであり、それぞれの地区の伝統として続けられています。

しかし、次期学習指導要領の完全実施を目前に控え、学校に求められるものが増大する中、こうした行事等の改善、見直しは大きな課題ではありますが、地区全体に関わるものであるためそれぞれの学校の議論だけでは前にすすみません。地区全体で議論をすすめ、改善、見直しを図ることについて、具体的にすすめている地区があります。その実態、改善・見直しの議論やその経過を調査しました。

② 方法

今回の調査は、家庭訪問を実施している学校がいくつあるとか、現在廃止を含め検討している学校がいくつあるかというような、教育活動の改善・見直し状況を定量的に把握し、分析考察を加えるといった手法を取りませんでした。数値を中心とした定量的な調査より、改善・見直しのための学校現場での議論やその経過を、当事者である教職員から直接ヒアリングをするといった聞き取り調査を行いました。

その理由は、次のとおりです。

- ・勤務時間の現状、業務改善のとりくみ、教育活動の改善・見直し等について、数値を中心とした定量的調査は、文部科学省をはじめ多くの諸団体、諸機関が実施しており、多岐にわたって詳細なデータが示されていること。
- ・ここ数年各学校で行われている教育活動の精選、業務改善等のためのとりくみについて、ある行事等を実施している、いない等の数値データより、各学校での議論の内容、経過、教職員の考え方や思い等を把握し、考察を加え一定の提案をすることのほうが、各学校で行われる教育活動の精選、業務の改善、見直し等のためのとりくみの参考になるのではないかとということ。
- ・教育活動の精選、業務の改善、見直し等のとりくみについて、各学校での議論の内容、経過、教職員の考え方や思い等を把握し、それを現場の教職員の「生の声」として示すことにより、教育活動の本質は何か、慣習的に実施してきた教育活動の教育的効果はどうか、教職員の業務の改善・見直しとどう整理するか等について改めて見つめ直すことが可能であり、このことがひいては長時間勤務の改善等につながるのではないかとということ。

Ⅱ 研究の概要

家庭訪問を見直す……………

家庭訪問は、年度始めに各家庭に訪問し、子どもの生活環境や通学路、また家庭の教育方針、学校への要望等を保護者と顔を合わせて話ができる貴重な機会として捉えられてきた。慣習的なものとして特段実施に向けて議論することもなく、当たり前のように計画されてきたが、多忙に拍車がかかる昨今、教育課程編成の見直しがすすめられ、地域によって様々な形が見られるようになってきた。

そこで、家庭訪問の教育的な意義を見直し、実施または廃止等に至るまでの議論やとりくみの現状を調査し、各学校における工夫を探ることで、家庭訪問を考えるヒントとなればと思い、以下の6校の教職員に協力してもらい、インタビュー調査を行い、報告をまとめた。

- ・家庭訪問希望制から全家庭実施にした小学校
- ・家庭訪問未実施から全家庭実施にした小学校
- ・数年前から希望制で実施している小学校
- ・今年度からとりやめた小学校
- ・3年前から未実施の小学校
- ・9年前から未実施の中学校

家庭訪問は、その効果が短期的にも実感的にも見えにくいため、見直し等がなかなかすすまなかった経緯がある。そこで教育課程編成において、様々な議論がなされ学校ごとに改善・見直しの工夫がすすんでいくことを願い、家庭訪問を考える際の議論の視点となるべきもの以下3点を提案する。

- ① 民主的に決めていくこと
- ② 様々な視点から、十分な議論をすること
- ③ 保護者や地域の実態を踏まえること

2分の1成人式を考える……………

2分の1成人式は、小学4年生において多くの学校で行われている。2分の1成人式は子どもの成長を願う多くの保護者にとっては、大変うれしく楽しみにしている行事である。しかし、現在子どもの人権に関わる問題、複雑化・多様化する家庭環境、子どもや教職員の負担、準備のための時数確保などの課題があり、2分の1成人式を見直し、実施を取りやめた学校や簡略化して実施している学校も増えてきている。そのような学校の考え方や実施方法などを調べ、分析考察を加えることによって、この行事を考えるヒントや参考になるものがあるのではないかと考え、3校の教職員にインタビュー調査を行い、報告をまとめた。

- ・2単位時間で実施した学校
- ・1単位時間で実施した学校
- ・実施をとりやめた（形式を変更した）学校

2分の1成人式は、子どもたちの成長を願い、成長の喜びを保護者と共有する一つの行事として実施してきたことが伺える。一方人権の視点と、子ども、保護者、教職員の負担から見直しを図っている学校もあることがわかった。そのことを踏まえ、2分の1成人式を考える視点として以下3点を提案する。

- ① 人権への配慮の視点から考える
- ② 子ども、保護者、教員の負担軽減の視点から考える
- ③ 教育活動全体から考える

現場に合ったOJTとミニ研修を……………

私たちにとって研修は、授業を含め教育活動をよりよいものにするための努力であり、子どもたちの教育に携わる教職員としての責任であるといえる。しかし現在の学校現場が多忙を極める中、教職員一人一人の力量向上をどう図るか、経験年数が少ない若手教職員の学ぶ場をどうつくっていくかといった課題がある。

このような現状の中、OJTやミニ研修の方法や効果等について調べ、分析や考察をすることにより、これらの課題を改善するヒントを見つけることができるのではないかと考え、OJTやミニ研修について実施している学校の教職員にインタビュー調査を行い、報告をまとめた。

- ・OJTの機能が機能している学校
- ・独自のミニ研修を実施している学校
- ・学校で考えた「サイコロ研修」を実施している学校

インタビューを通じて、OJT・ミニ研修を充実させるための大切なことや共通点が見えてきた。これらをまとめ、教職員一人一人の力量向上と若手教職員の育成を、学校現場の中で図るため以下3点を提案する。

- ① OJTをすすめるにあたって必要な条件
- ② ミニ研修を継続・充実させるために必要なこと
- ③ 働く喜びを感じるようにするための条件

学級経営参考資料をめぐる……

経験の浅い若手教職員にとって、力量向上のために大きな役を担っているのが、先輩教員の存在である。しかし、お互いの多忙から、相談したり、教えてもらったりという時間と場がもてないという状況にある。そのような中、年度始めの学級づくりをスムーズに行うにはどのような手だてが必要か、若手教職員の力量向上のための手だてはどうしたらよいのかが課題となっている。

このような現状の中で、ある中学校では、「学級経営参考資料」といってすべての教職員が共通理解のうえで指導していくマニュアルを用いて各学年で足並みを揃えた学級経営を行っている。このとりくみが学級担任の多忙解消や年度始めの子どもの混乱や不安の軽減、若手教職員の力量向上において、どのような影響があるのかを該当中学校の教職員にインタビュー調査を行い、報告をまとめた。

インタビューに答えた教職員のほとんどが、学級経営参考資料の活用効果について概ね高い評価をしている。しかし、「もっと自由にやりたい」「指導資料に頼ってしまう」ということを挙げている若手教職員もいる。またベテラン教員は、「資料通りにやればいいと考えている若手が多い。本来の目的を踏まえて活用することが大切」「生徒が自発的に工夫していけるよう、生徒の主体性を重視して活用することが大事」と答えている。これらの意見を踏まえ、「若手教職員は、よく教わり学び、ベテラン層の教職員は、よく教え導く」ことは、職員室の文化として継承していくことが必要であろう。インタビューの結果を受け、以下の2点を提案する。

- ① 学級経営参考資料による指導を含め指導全般にわたって、「教え、学び合う学校の風土と文化を分会内につくる」ことを組合員自身の問題と捉え考えること。
- ② 子どもたちの実態、学校や社会の姿、保護者の見方・考え方等を踏まえ、教職員自ら見直しや改訂のための議論を積極的にすすめるとともに日常の指導の中で、子どものためを視点に不断にふり返りを行うこと。

地区全体で教育活動を見直す……

教育活動の中には、地区全体で行われている水泳大会、音楽発表会等一つの学校だけでは継続や廃止を含めた判断ができない教育活動がある。多忙な状況、長時間勤務を改善し縮減していくための一つとして、地区全体で行っている教育活動の見直しをすすめることは大切ではないかと考える。地区全体で行う教育活動は一定の歴史と実績や地域や保護者の肯定的な見方もあり、検討、改善の俎上に載せにくいという面は否めないが、質の高い教育に向け、教材研究の時間をきちんと確保したり、子どもたちと向き合う時間をつくったりするためにも、議論しなくてはならない課題と考える。

ある地区では、このことについて検討する組織をつくり、地区全体で見直すこととした。本調査では、議論に関わった人や保護者、教職員にインタビューすることを通して、地区全体で教育活動を見直す意味や必要性について考えることとした。

委員、教職員、保護者からのインタビューを通して様々な声を聞くことができた。先人たちが築き上げた教育文化や実践を大切にしつつ、新たな学校教育を創造していくためには、各学校だけでなく地区全体としてもこれからの学校教育の姿を模索し続けていく必要がある。そこで、次のことを提案する。

- ① 新たな学校教育を創造していくために、地区全体に関わる教育課題について、分会でも積極的かつ建設的に議論すること
- ② 保護者・地域との合意形成の場を大切にすること
- ③ これからの学校、学校教育に対する夢やロマンを大いに語りながら、教育をすすめていくこと

家庭訪問を見直す

1 現状と課題

(1) 現状

学校教育は当然ながら、学校だけで完結するものではない。児童・生徒を十分に理解し向き合うには、そのバックボーンである家庭や保護者との連携を密にすることも重要である。また、学校と家庭とが、教育方針やめざす方向性を共通理解することが、教育効果を高める近道であり、教育的なパートナーである保護者との協力体制の構築は、学校の教育活動を円滑にすすめていくうえでも重要な位置を占めている。

その手段の一つとして家庭訪問がある。年度始めに各家庭を訪問し、子どもの生活環境や通学路、また家庭の教育方針、学校への要望等を保護者と顔を合わせて話ができる貴重な機会として捉えられてきた。特に年度始めのできるだけ早い時期に保護者と面談することは、その後の教育活動に効果があるものと考えられ、4月下旬から5月初旬にかけて計画している学校が多い。

多忙に拍車がかかる昨今、教育課程編成の見直しがすすめられ、家庭訪問のあり方についても地域によって様々な形が見られるようになってきた。

(2) 課題

多くの教育効果が期待される一方で、家庭訪問を行うにあたりいくつかの課題も挙げられている。

- 年度始めの多忙な時期に訪問計画の作成に多くの時間が費やされること。
- 学級づくりの大切な時期に授業を打ち切りにすること。
- 家庭の都合で計画通りに訪問ができなくなることがあること。
- 仕事をしている保護者も増え、休みがとりにくく保護者自身にも負担が増えていること。
- 必要性を感じない家庭が増えていること。
- 学級の児童・生徒数が多い場合、かなりの時間を要すること。

などである。

2 研究の概要

(1) 研究の目的

家庭訪問の教育的な意義を見つめ直し、実施または廃止に至るまでの背景やとりくみの現状を調査し、各学校における議論の内容や教員の思いや考えを探ることを通して、家庭訪問について考える参考となればと思い、インタビュー調査を行い、報告をまとめることとした。

(2) 研究の内容・方法等

以下の6校を対象としてインタビュー調査を行う。

【インタビュー調査を行った学校】

	学校規模	地域性
A校：全家庭実施 (小学校中規模校)	全校児童 462 人 19 学級 (特支 3)	教育に熱心な家庭と無関心な家庭の二極化がすすむ。参観会や懇談会の出席率は低い。
B校：全家庭実施 (小学校小規模校)	全校児童 44 人 5 学級	保護者はとても協力的だが、子どもの学習に対してはあまり関心がない。
C校：希望制 (小学校中規模校)	全校生徒 434 人 19 学級 (特支 2)	参観会や懇談会の出席率は非常に低い。協力的、批判的な保護者が両極端。
D校：実施していない学校 家庭確認のみ (小学校中規模校)	全校児童 266 人 13 学級 (特支 2)	協力的な家庭が多く、参観会や懇談会の出席率も比較的高い。過去にコミュニティスクールの研究校。
E校：実施していない学校 (小学校中規模校)	全校児童 527 人 18 学級 (特支 3)	古くから住んでいる家族が多く、地域の祭典などの盛り上がりがあり、地域のまとまりがある。
F校：実施していない学校 (中学校中規模校)	全校生徒 553 人 17 学級 (特支 2)	学校の教育活動に対する理解があり、参観会や懇談会などの出席率も高い。

(3) 研究の結果

A校…希望制家庭訪問から、全家庭訪問に戻った学校

A校は、教職員から家庭訪問は負担が大きいという声が挙がったことから、年度末の教育課程編制会議において議論を行った。保護者と教職員にアンケート調査を行い、「必要と感じる」保護者は、60.1%、「必要と感じない」保護者は 35.6%という回答を得た。

必要と感じる保護者の中には、「今までどおり実施」が 66.8%、「希望制にする」が 34.2%、「通学路や家の確認のみ」が 9.7%と意見は分かれている。

その結果を受け翌年度は、希望制の家庭訪問を行うこととし、訪問しない家庭については、家の確認をするという方法をとった。また、年度始めの参観会や懇談会への参加を強く促し、担任と顔合わせができるように配慮した。希望した家庭は3分の2程度となり、担任からは「負担は軽減された」という声が多く、保護者からも特段困ったという意見は出ていない。

しかし、翌年度は教育委員会の意向により全家庭実施に戻ることになる。希望制の実施については1回のみのとおりくみとなったため、保護者からは「全員やらなきゃいけないんですか」「選択制じゃないんですか」という問い合わせは多くあった。

【A校の職員へのインタビュー：対象者3人 30歳代、40歳代、50歳代】

家庭訪問実施のメリットは何ですか

連携に向けたコミュニケーションの入口として

30代女性	家庭の様子はよくわかります。「この子、家の人が忙しくてなかなか見てもらえてないんだな」など家に行って話すことで、なお実感できます。だから <u>子どもに対してどういう支援をしていこうか考えられます</u> 。あと、 <u>保護者の印象もわかるので、いざという時に「初めまして」よりはコミュニケーションが図りやすい面もあります</u> 。
50代女性	その子の背景がわかるので、 <u>指導の仕方を変えることも</u> できます。また、熱心なお母さんと、じっくり聞きたいことを用意して待っていてくれたりするので。ましてや私は支援学級担任なので、時間にゆとりがあるので、大変だけど、ゆっくり話ができるのは、後にはつながります。

家庭訪問実施のデメリットは何ですか

見えないところの負担が大きい！

40代女性	家庭訪問に行くまでには、地図を見ながら15分で回る効率のよいやり方とか、 <u>実は下準備にものすごく時間がかかっていて</u> 、実際にお休みの日にその地域を回って、家を確認しています。本番スムーズに時間通り行けるようにとか、駐車場のリサーチとか、見えないところの時間が負担かな。あと、運転に自信がないので、知らないところでぶつけてきちゃうとか、側溝に落ちて助けてもらったこともあります。
30代女性	4月はつらいですね。それどころじゃないと言うか、 <u>本当にクラスづくりしなきゃいけないのに</u> 、子どもを早く帰して家を回らなきゃいけない。「何か違うよな」って思うことがあります。
50代女性	私じゃないけど、4時半過ぎに指定されちゃうとか、しっかり希望をとって組んでいるのに「やっぱりだめでした。変えてください」というのがあって <u>計画通りにいかないことが結構ある</u> 。

今後、家庭訪問はどうあるべきでしょうか

なければならないで新しい工夫を！

40代女性	選択制で、もうちょっとやってみてもよかったですね。何かつかむ前に変わってしまった感じなので。何年かやっていたら、例えば懇談会に来る保護者が増えるとかよい効果があったり、逆に保護者からの連絡帳や電話が増えるような課題が見つかったりするなどしたかもしれないですね。
50代女性	<u>ご家庭の事情を知りたいと思えば、親に来てもらったり、「いいですか」と言って訪問したりすることはいつでもできると思います</u> 。保護者って、お子さんの学校での様子を知りたいと思うけど、4月のこの時期では、まだあんまり見えていないところも確かにあって、期待されているほどお伝えできているかというとなかなか感じます。
30代女性	家庭訪問がなければならないで、 <u>きっと保護者と連携していく道を考えるんだと思います</u> 。今は実施しているからそれを生かしていこうと考えるけれど、 <u>なくなればそこで新しい方向を見出していくんじゃないですかね</u> 。やっぱりそういう風に考えていかないと、仕事っていつまでも増え続けると思います。他のところでは家庭訪問をやっていない地域もありますよね。それでも成り立つんだから。

【教育課程アンケート 保護者の声】

新学期、保護者も子どもも希望と不安でいっぱい！

- ・新しく担任を受けもたれた先生と、10分でもゆっくり話ができることは、親としてありがたく、この1年間安心して子どもの学校生活をサポートしてもらえると考える大事な機会だと思っています。
- ・子どもの生活態度が表れる家庭環境が見えることは、子ども理解へとつながるのではと思います。新任や異動してきた先生の地域の把握にも役立つと思います。学校と家庭との連携を考えると必要だと思います。
- ・1クラスの人数が多いため、ゆっくりと話せないで希望制にすれば1人当たりの所要時間が多くなり安心できる。
- ・参観日の懇談会や保護者面談、連絡帳もあるので、家庭とのやりとりは十分できる。
- ・新学年の始まりで先生や友達も変わるので、学校で先生と面談できればよい。

B校…家庭訪問を実施していなかったが、実施に変えた学校

B校は、家庭訪問の負担が大きいとの理由から、少なくとも6年前から実施を見送っていた。家庭訪問を実施しない代わりに、子どもたちの家の所在地や地域の主要な施設を車で回る「地域を知る日」を設定した。「地域を知る日」については、何人かの職員がグループとなって、車を使って巡回をした。さらに家庭訪問がない代わりに、夏休み前に面談を取り入れていた。

しかし、学力的にも家庭的にも気になる子については、早い段階でしっかり親と話をする必要性を感じたこと、さらにB校は単学級・複式学級がある学校であり、複式学級については多少児童の人数が多いが、単学級では5人のクラスもあり、2日間で全家庭の訪問も可能であることを踏まえ、家庭訪問をやった方が効果的ではないかということから、教育課程で家庭訪問実施の提案をした。家庭訪問実施に対する反対意見も出なかったため、2018年度から家庭訪問を再び実施するようになった。

【B校の職員へのインタビュー：対象者2人 30歳代、40歳代】

地域や保護者のみなさんはどんな感じですか

40代男性

山合に囲まれたのんびりした地域である。保護者に関して、勉強について「できてほしい」という思いはあまり感じられず、学校が楽しければよいという保護者が多い印象を受ける。それがいいところでもあると思う。

家庭訪問実施のメリットは何ですか

家庭との関係は密になる

40代男性

協力的な親が多いが、家庭訪問を行いさらに連携を密にできる。また年度当初、家庭訪問を行い関係ができれば、後の対応等が楽になると考える。

また、学校規模が小さいので、短縮5時間の授業を組んでも3日間で家庭訪問ができる。(1～2時間の授業カットで済むため、授業時数に大きな影響が出ない)

児童数が少ないので1か月くらいで全ての児童の様子がわかり、家庭訪問の際、児童の生活の様子を具体的に話ができる。

30代女性

三者面談のように学校で話をするのと、家で話をするのでは、親の話しぶりが違った。家の方がざっくばらんに話ができ、学校でできないような話もしてくれた。(過去の友人関係のこと等)児童数が少ない割に、いろいろな問題が多いような気がするので、家庭訪問の効果が大きいと感じている。家庭訪問をやってみて「やっぱりよかった」という教職員が多かった。

家庭訪問実施のデメリットは何ですか

保護者はなんで？

40代男性

保護者の中には、なんで家庭訪問が復活したの？と思っている方が多い。(なければいいと思っている)



C 校…数年前から家庭訪問を希望制で実施している学校

C校の家庭訪問は希望制をとっている。家庭訪問を行うにあたり、全ての家庭を回ろうとすると、授業をカットしたり放課後の時間がなくなったりする。そのため、希望のある家庭にだけ行けば授業時数を確保でき、さらには教員の負担も減るのではないかという議論が交わされ数年前から希望制にしている。家の場所がわからないままというのかもしれないかということ、希望がない家庭については、家の場所を実際に出向いて家の所在地の確認をしている。

【C校の職員へのインタビュー：対象者1人 40歳代】

地域や保護者のみなさんはどんな感じですか

40代男性	学校の教育方針に対して理解を得られている感触が少ないという印象。学校評価でも、結構率直に言いたいことを言う方が比較的多い。また、授業参観や懇談会の出席率が非常に低く「懇談会の意図がわからない」「子どもと一緒に帰りたいから」といった理由で、参加率がなかなか上がらない。朝の読み聞かせ、校内の草取り（祖父母の会）等、呼びかければ協力してくださる方はたくさんいる。
-------	---

家庭訪問を希望制で実施しているメリットは何ですか

教員も保護者も負担軽減！

40代男性	高学年になるほど希望する家庭が少なくなる現状がある。1クラスあたり、1・2年生で10数件、6年生で4～5件くらい。そのため <u>日程調整の必要がなくなったり、訪問件数が減ったりすることで教員の負担は確実に減った</u> 。家庭訪問を行うためのまとまった時間の確保が必要ないので、 <u>授業時数を確保できるようになった</u> 。また、家庭訪問に必要感を感じていない保護者にとっては、 <u>保護者自身の負担も減っている</u> 。
-------	---

家庭訪問を希望制で実施しているデメリットは何ですか

保護者とのつながりは大切

40代男性	教員側が会って話をしたいと思っている保護者ほど家庭訪問の希望をしないため「だったら最初からやらなくてもいいのでは」という教員の声も少なからずある。また、こちらの希望もあるため「希望制としますが、こちらからお声がけさせていただいて、訪問させていただく場合もあります」という文面を通知に載せ、学校側からの働きかけが必要な時もある。4月の時数を確保できる魅力はわかるが、 <u>保護者とのつながりがもてることについては、家庭訪問はやはり大きな意味をもつと感じる</u> 。
-------	---

D 校…今年度から家庭訪問をとりやめ、希望制にした学校

D校の家庭訪問が廃止に至った経緯については、年度末の管理職からの提案であった。教育課程編制会議の中で教職員による議論が行われた訳ではない。比較的協力的な保護者が多く、参観会や懇談会への出席率も高いこの学校には、家庭訪問を実施しなくても家庭と連携していけるとの管理職の判断からだ。年度始めの多忙な時期に、計画を立て準備をすることや一週間程度、午後の授業を打ちきりにすることの教育的効果と実際の負担を考慮しての英断である。

対応策としては、年度始めの参観会とPTA総会、懇談会を土曜日に開催し、保護者の参加率の向上を図った。土曜参観は、多いところでは9割以上、平均して7割以上の保護者が懇談会にも参加し、母親のみならず、父親の参加も多かったという。担任との顔合わせは、十分に果たせた状況となっている。

4月末には希望制の面談を行い、その後、家の確認を学年部で行っている。担任一人で回るのではなく、学年部で一緒に確認することで学年の児童全体の相関関係や生活状況が把握しやすくなるという利点が見られた。

7月には全家庭を対象に教育相談を計画し、全ての保護者と話す機会は確保されている。

【D校の職員へのインタビュー：対象者4人 30歳代新採2年目、30歳代、50歳代】

保護者との連携や協力するうえで大事にしていることは何ですか

30代女性	とにかくこまめに連絡をとるようにしています。学校からの電話は、どうしても悪いイメージがあるので、「今日こういういいことがあったので」とよいことを電話で連絡したり、学級通信でタイムリーに学級の様子を載せたりしています。
50代女性	保護者が勉強や友だち等いろいろなことで「どうしたらいいんでしょう」と相談にきた際には、いつでも具体的な案を出せるように心がけています。

家庭訪問を希望制したことのメリットは何ですか

教員も保護者も負担軽減！

50代女性	最初に思ったのは、負担が当然なくなるなということでした。 1クラス28人、しゃべるだけでも一軒15分かかって、本当に精神的、肉体的な負担は少なくなるのは確かだと思いました。 今、親の顔がわからないこともあるんですけど、何かしらの問題を抱えたり、担任に相談をしたかったりというような話すことが必要な親は、その後の面談に自ら希望をして来るというフォローがあるので、100%よくはないかもしれないけれど、比較的よい改革だと思いました。
30代女性	保護者からは、「仕事を休まなくて済むというのはよかったわ」という反応をいただきました。 家庭訪問がなかったから困ったというお宅もありません。 「何でやらないんですか」という問い合わせも全くなかったです。親としては、何だか安心したというか、よかったと捉えたんじゃないでしょうか。

家庭訪問廃止のデメリットは何ですか

若手は不安に？

20代男性	学校に家庭訪問はつきものみたいな考えがあったので、「なくなるとどうなるんだろう」という不安や「どんないいことがあるのか」ということがわからなかったです。 去年は初任者として、なるべく無駄の無いようにいろいろな経路を考えていて「大変だし面倒くさいな」なんて思っていたんですが、顔がわかるのと家が明確にわかるのは大きいと思います。家の確認はしっかりしておきたいです。
-------	--

今回の見直しについてどう考えますか

「子どものために！」が山積

先日の分会会議で、多忙化解消に向けて話し合ったんですけど、急にはみなさんよい案が思い浮かびませんでした。「子どものためにこれやったほうがいい」「こうしたほうがいい」とか研修とか何か来て、もうばんばんになっちゃって。年々多忙になっているんですね。何かをやっぱり切っていくと精神的にも不安定な先生が出てきちゃうのでは。

自分も切れないと思っていたんですけど、**こうして本当に一つずつ「本当になくなったらだめなのか」を考えていけば、いくつかそういう風に改革ができるものもあると思います。**自分たちは長くやっているから、もう絶対あるものだと思っちゃってるけど、**ばっと180度転換すれば、「なくても意外に困らなかったな」というのもあるかもしれない。**そういう思い切った改革をしていったら、先生方の負担も減ると思います。

E 校…家庭訪問をとりやめた学校

E 校は 3 年前（2015 年度）から家庭訪問の実施をとりやめた。2015 年度に向けての教育課程編成会議の際、家庭訪問について話題になり、次年度から実施しない方向性で固まった。議論の場では、やる・やらないはおおよそ半々くらいだったが、やらない方向でという雰囲気があり、2015 年度から未実施となった。

家庭訪問を未実施にした 1 年目については家の確認はした方がよいだろうとのことで、確認する日をあえて設定した。2015・16 年度の 2 年間は家の場所を確認をしたが、2017 年度は行っていない。

【E 校の職員へのインタビュー：対象者 30 歳代、40 歳代】

地域や保護者のみなさんは、どんな感じですか

40 代男性	昔からこの地域に住んでいる方が多く、祖父母と暮らしている家族が多い。そのため、地元のパワーがあり、お祭り等大変活気がある地域だと思う。保護者は協力的である。
--------	--

家庭訪問廃止のメリットは何ですか

教員も保護者も負担軽減！

40 代男性	4 月の忙しい時期に家庭訪問の <u>日程調整をする必要がなくなり、教員の負担が減った。</u> 保護者にとっても <u>仕事を休んだり、家を片付けたりする必要がなくなり</u> 、負担が減ったようである。
--------	---

家庭訪問廃止のデメリットは何ですか

教員は親の顔を知りたい 保護者は教員と話をしたい

40 代男性	家庭訪問の経験がない教員にとってはそれが当たり前で、逆に親に会うと緊張して 1 回目に会うときの負担が大きいようだ。大きな緊張になってしまうようだ。 去年は夏休み前と通知表を渡す 10 月に保護者面談があったが、今年は 10 月だけにした。そうしたところ、4 月から先生に会って話をする機会がほとんどなく、あまりにも時間が空きすぎではないかということで、 <u>保護者からはもう少し先生と話がしたいという声があがった。</u>
30 代女性	<u>親の顔を知らずに数か月間過ごすことが、教員側にとっては不安。</u> 特に、過去に家庭訪問を経験している人はそう感じている。先生、先生って言うてくる地区だけれども、 <u>保護者と少し疎遠になっているかもしれない。</u>

F 校…家庭訪問をとりやめた学校

それまで毎年行っていた家庭訪問について、教員による学校評価の中で実施しなくてもよいという意見が増えた。そこで教育課程編成の中で議題にし、家庭訪問の実施・未実施について議論を重ねた。家庭訪問がなくてもそれほど困らないし、何より日程調整の事務的作業が削減され、さらには授業時数が確保できるという意見が大半を占める中、家庭訪問を行い、親とのつながりをつくっておくことは大切との意見もあった。全職員で慎重に検討を重ねた結果、次年度以降家庭訪問を実施しないという結論に至った。

【F 校の職員へのインタビュー：対象者 30 歳代、40 歳代】

地域や保護者のみなさんはどんな感じですか

40 代男性	保護者は協力的。学校行事等にも比較的多くの家庭が参観に来る。
--------	--------------------------------

家庭訪問廃止のメリットは何ですか

ゆとりが生まれた 授業時数の確保

40 代男性	<u>4月の慌ただしい時期に、日程調整等の必要がなくなり、ゆとりが生まれた。</u> 家庭訪問を実施していたときは、5日間の日程でおよそ10時間分の授業が削られていたが、その分の <u>授業時数が確保できるようになった。</u>
30 代男性	親の顔を知らなくても、実際にそれほど困ることはない。家の所在地を知る必要があると思うが、今ではネットで検索できるので、直接出向いて確認できるからよい。

家庭訪問廃止のデメリットは何ですか

ないなら「ない対応」を！

30 代男性	<u>特に大きなデメリットを感じることはない。</u> 生徒指導が必要になったときには、家庭訪問を行い、直接顔を見て話をするようにしている。
--------	---

3 考察と提案

(1) 考察

家庭訪問は、学校ごとに実施方法等は異なっているが、いずれにしても様々な視点から、議論がなされていることがわかる。

家庭訪問の目的は、教員と保護者とのコミュニケーションを図る場、子どもの理解を深める場である。保護者との連携・協力体制は、家庭訪問や保護者面談のように、ある一定の決められた時期に集中してとりくむものと、担任と保護者の日々のやりとりの中で醸成されていくものがある。インタビューをとおしてわかることは、家庭訪問は、保護者と顔を合わせて話のできる貴重な機会であり、互いの印象を感じ取ったり、子どものよりよい成長のために思いを確かめ合ったりする場であり、文字通り家庭を訪問し、連携協力のための入口に立つことが目的であると考えられる。その目的を考えると、ずいぶんと昔から行われてきたことも頷ける。しかしながら、学校現場の多忙が問題視されている昨今では、家庭訪問を実施することの教育的効果と実際の負担を考えざるを得なくなっているのも確かであり、実際に行事の見直しの一つとして家庭訪問の実施をどうするかという議論が、各学校で行われている。

調査していく中で、家庭訪問を実施するかどうかの判断は3点と思われる。1点目は4月当初の慌ただしい時期に実施するということが教員が負担に感じている点である。2点目は、家庭訪問を実施しないことによるその後の学校と家庭との関係性に大きく響くかという点である。3点目は、学校規模も関係している点である。B校の40代教員の「学校規模が小さいので、短縮を組んでも3日でできる」というように、小規模校においては訪問件数が少ないため、授業時数への影響を最小限でとどめることができる。調査した小規模校が今まで数年間家庭訪問を取りやめていたが、実施する方向に戻したのはこの影響が大きい。

今までと同じように実施している学校、とりやめた学校等、家庭訪問に関してのとりくみや捉えに関しては様々である。特にとりやめた学校は、家庭訪問の代わりに夏休み前や夏休み中の面談を取り入れたり、子どもたちの家の所在地を確認したりと、家庭とのつながりを切らず大切にしていこうという視点をもち続けている。

また、希望制にしている学校の50代女性教員は「1クラス28人…中略…本当に精神的肉体的な負担は少なくなる」と答えているように負担は軽減されることがわかる。ただし、教員側がぜひ話をしたいと思っている家庭に限って希望してこないという現状もあるため、それに関しては家庭訪問の通知文に「希望制としますが、こちらからお願いさせていただく場合もあります」という文面を載せるという工夫もしている。

家庭訪問を取りやめて数年経つ学校からの調査で興味深い話を聞くことができた。家庭訪問をとりやめたことによって、保護者と話す機会が減り、若い先生方が親と話をするのを怖がっているような気がするというのである。親から電話がかかってくると構えるようになっていく現状があるが、それは顔を知らないことが大きく影響しているのではないかという話を伺った。初めて担任をする人にとっては保護者とのコミュニケーションが大切で、顔を合わせていればもしかしたらもっとスムーズな対応ができるのかもしれない。家庭訪問は、忙しいといえども若い教員にとっては貴重な経験になっているのではないかという見方もある。

(2) 提案

今回の調査を通して、家庭訪問を実施するに当たっては教育的効果と負担と両面があることがよくわかった。C校40代男性教員の声として、「保護者とのつながりがもてることは、…やはり大きな意味をもつと感じる」とあるが、一方F校40代男性教員は、「4月の慌ただしい時期にゆとりが生まれた」と言っていることはこのことの証左である。

教育課程編成において、業務改善の工夫について様々な議論がなされることが大切ではないかと考える。そこで家庭訪問において議論の視点となるべきもの示し、提案としたい。

1) 民主的に決めていくこと

まずは、前提として、家庭訪問実施の有無については、職員間での共通の理解や認識がなされているかどうかは重要である。学校は、教職員の知恵、知見、教育に対する思いや願いによって変わっていかなくてはならない。立場の違いこそあれ、まさに民主的な職場であることが求められる。民主的な職場で、民主的な議論によって、教職員の合意形成を図り、学校を自らの手で変えていくという職員集団でありたい。それが、子どもや保護者の思いや願い、付託に応えることに他ならない。

2) 様々な視点から、十分な議論を大切にすること

家庭訪問を実施する場合、「午後の打ち切りによる授業時数」「年度始めの学級づくりの時間」など、保護者との関係づくりのために子どもと向き合う時間が十分にとれない。それらの時間をどのように生み出していくかは、家庭訪問を行う担任の準備にかかる大きな負担も含めて考えるべきである。

家庭訪問を実施しない場合、「保護者と面会し、思いを共有する機会」「地域や家庭を知る機会」「支援へのヒント」など、保護者との関係づくりや地域を知る機会が十分にとれないという状況が出てくる。また、子どもの家の所在がわからない。家族の様子がわからないこと等は、防災、防犯の面から不安材料の一つでもある。

いずれにしても実施する場合のメリット、デメリット、実施しない場合のメリット、デメリットについて、様々な視点からの十分な議論が大切ではないか。

3) 保護者や地域の実態を踏まえて議論すること

その学校の置かれている地域は、教育活動に対して理解を示し協力的であるかどうかは重要な視点である。協力的といっても子どもの学習や提出物等に関心が高いということではなく、参観会や懇談会、行事等へもよく参加し、コミュニケーションがとりやすく学校との風通しがよいかどうかである。よい場合には、訪問をすることでより関係性が強固になることもあるだろうし、いつでも話せるのだからと訪問をする必要がないという考え方もある。

家庭訪問は、長く慣習的に行われており、保護者や地域の実態との関係性も強い。したがってこの見直し、改善等については、保護者や地域の実態を踏まえた議論が欠かせないものとする。

また、実施の方法等を変えていく際には、保護者や地域の賛同を得るための情報提供や意見交換も大事にしたいものである。



2分の1成人式について考える

1 現状と課題

(1) 現状

現在、小学4年生において、「2分の1成人式」が多くの学校で行われている。この「2分の1成人式」の始まりは、1980年代に兵庫県の小学校教員が、「10歳という年齢は成人である20歳までの折り返し地点であると同時に、高学年への仲間入りの年齢であり、小学生としての大きな節目に、親子ともに成長を意識できるイベントをしたい」という思いから始めたといわれている。それが徐々に全国に広がり、2000年代から多くの学校で行われるようになった。この「2分の1成人式」は子どもの成長を願う多くの保護者にとっては、大変嬉しい行事であり、楽しみにしている保護者が多い。しかし、近年、家庭環境の複雑化や学校現場の多忙化などの面から、2分の1成人式について見直しをしている学校が増えてきている。

(2) 課題

家庭環境への配慮や、子どもや教員の負担等の観点から、以下のような課題がある。

- ・家庭環境が複雑になってきている現在、一斉に親へ感謝することが難しい。
- ・虐待を受けているなど、様々な家庭環境への配慮が難しい。
- ・複雑な生育歴により、生い立ちを振り返ること自体が困難な家庭がある。
- ・事前の準備に多くの時数が費やされ、子どもや教員の負担が大きくなっている。
- ・2分の1成人式は、通常の授業参観よりも、保護者の「参加しなければいけない」「参加しなければ子どもがかわいそう」といった意識が強く、実施日に仕事のある保護者にとっては、勤務の調整など参加することが負担になってしまう。

2 研究の概要

(1) 研究の目的

多くの学校で2分の1成人式が実施されているが、子どもの人権に関わる問題、複雑・多様な家庭環境、子どもや教職員の負担、準備のための時数確保などの課題がある。最近では2分の1成人式のあり方を見直し、実施を取りやめた学校や簡略化して実施している学校も増えてきている。2分の1成人式を取りやめたり、簡略化したりした学校について、その経過や議論の内容等を調査し、2分の1成人式について考えることを目的とする。

(2) 研究の内容・方法等

支部内の小学校に対し、2分の1成人式の2017年度実施状況と2018年度計画についてアンケート調査を行った。その中から、2017年度に2分の1成人式を、①2単位時間で実施した学校、②1単位時間で実施した学校、③実施を取りやめた学校（形式を変更した学校）にインタビュー調査を行った。

(3) 研究の結果

< アンケート調査の結果 >

1-① 2017 年度、2 分の 1 成人式を実施しましたか？

実施した	35 校
実施していない	10 校

② 本番当日は、何単位時間使って実施しましたか？

2 単位時間	20 校
1 単位時間	15 校

2-① 2018 年度、2 分の 1 成人式を実施しますか？

実施する	31 校
実施しない	10 校
未定	4 校

② 実施する最も大きな理由は何ですか？

教育的意義、効果が大きいから	20 校
保護者が楽しみにしているから	4 校
2 分の 1 成人式の代わりとなるものがないから	1 校
未回答	10 校

③ 実施しない主な理由は何ですか？

人権に関わる問題があるから	6 校
準備、計画にかかる負担が大きいから	4 校

< インタビュー調査の結果 >

① 2 単位時間で実施した学校

意義はあるが、負担は大きい

いつ、どのような形式で実施しましたか

本校は、1 月末に 2 単位時間使って実施しています。2 部構成になっていて、第 1 部はこれまでの 10 年を振り返り、グループごとに発表します。第 2 部は自分の夢を発表したり、合唱をしたりします。

準備にどれくらいの時間をかけましたか

準備は、12 月から始め、総合的な学習の時間と音楽の時間で 15 時間、休み時間を使って準備しました。

子どもたちの様子はどうでしたか

子どもたちは「2 分の 1 成人式を成功させる」という目標に向かって、楽しみながらよく頑張っていました。実施後の子どもたちの様子ですが、これまで多くの方にお世話になりながら成長してきたことに気付いたり、4 月からは高学年になるんだという意識が高まっていたりと、成果が表れていました。

保護者の感想はどうでしたか

「子どもたちが頑張っている姿、夢を語る姿を見ることができて嬉しかった。」といった好意的な感想が多くありました。

準備にかかる負担はどうでしたか

2分の1成人式は実施してよかったと感じる点も多くありますが、その反面、負担が大きかったことは事実です。授業中だけでなく、休み時間や放課後等にも準備に追われることもそうですが、様々な環境の家庭がある中で親への手紙を書かせるのが大変でした。また、それまで学習していた総合的な学習の内容を途中で切り上げて、2分の1成人式の準備に入ってしまったことも課題だと感じています。

2分の1成人式のあり方について何かご意見はありますか

2分の1成人式を実施することのよさはもちろんありますが、負担の大きさを考えると2分の1成人式ではなく、他の形でよいのかなとも思います。2018年度は内容を見直し、1単位時間で実施する予定のようです。

② 1単位時間で実施した学校

簡略化し、負担を軽減

いつ、どのような形式で実施しましたか

本校は、2月の土曜日に行う授業参観日に合わせて、2分の1成人式を実施しています。1単位時間を使って実施し、内容は呼びかけと合唱です。呼びかけの言葉は、今までの思い出や親へ伝えたいことなどを子どもたちから募集しました。合唱は2曲ですが、1曲は教科書に載っている曲で、もう1曲は親への感謝をテーマにした曲を選びました。親への感謝の手紙などは、すべての子どもが家庭に恵まれているわけではないので実施していません。

準備にどれくらいの時間をかけましたか

本番当日までの準備ですが、12月から実行委員が休み時間を使って動き出し、1月から学年での練習が始まりました。

準備にかかる負担はどうでしたか

呼びかけの練習と合唱の練習が主になりますが、合唱曲の1曲は教科書に載っている曲にしたので、音楽の時間にも練習することができ、大きな負担はありませんでした。当日は体育館で実施しましたが、会場の飾り付けもしませんでしたし、卒業式用に設置されているステージをお借りしたので、会場の準備に時間がかかることもありませんでした。

2分の1成人式のあり方について何かご意見はありますか

初任校と2校目の学校は他市の小学校に勤務しました。どちらの学校も2分の1成人式を実施していませんでした。本市に異動して赴任した前任校では、1年目に4年の学年主任を任されました。その学校では、前年まで2分の1成人式を実施してきたようですが、総合的な学習の時間で他に学習したいことがあったため、子どもと話し合って2分の1成人式は実施しませんでした。もしかしたら、4年生の中には2分の1成人式を楽しみにしていた子どももいたかもしれませんが、実施しない理由をきちんと子どもたちに説明したので、反対する子どももいませんでした。保護者からも特に「実施してほしい。」との声も挙がりませんでした。2分の1成人式を実施しないかわりに、総合的な学習の時間で保護者の協力を得たり、学習したことの発表会を開催したりと、子どもたちの成長した姿を見ていました。2分の1成人式は、子どもたちの成長の様子が見えるため、実施する意味はあると思いますが、子どもたちの成長は、2分の1成人式以外の様々な活動でも見ていただけたらと思います。

③ 実施をとりやめた（形式を変更した）学校

負担も減り、年間を通じた探求学習が可能になる

どのような形式で実施しましたか

2月の授業参観に合わせて、1単位時間を使って「成長を伝える会」という名称で実施しました。主として、総合的な学習の時間に学習してきた「福祉」について発表する会でしたが、福祉について学習する中で、子どもたちが家族への感謝の気持ちをもったので、発表会の一部分として家族に感謝の気持ちを伝える場を設けました。

前年度まで実施してきた2分の1成人式をやめるに至った経緯を教えてください

校内では、以前から「2分の1成人式をやめよう」という声は挙がっていました。しかし、なかなかやめられないでいました。その理由としては、本校は全学年単級であり、4年の学級担任に若手教員や講師になるということが続いていたため、若手や講師にとっては前年度までやっていたことをやめるのは勇気のいることですし、前年度までやっていたことはやらなければいけないという意識もあったのではないかと思います。そのような状況の中で、総合的な学習の時間の年間計画を見直しました。その中で、4年生の総合的な学習のテーマに何のつながりのない2分の1成人式が1月から突然入ってくるのはおかしいし、それに加え、合唱練習や自分の夢を語る活動が総合的な学習の時間の探求学習にはそぐいません。それなら12月まで学習したことをきちんとまとめたり、表現したりする時間に充てたいということになりました。また、2分の1成人式は、どの子も幸せなものではありません。家庭環境も複雑になってきている状況の中で、「お父さんありがとう、お母さんありがとう」と伝えることが本当によいことなのでしょう。小さい頃の写真を集めることも大変になってきています。このような理由から、2分の1成人式をやめることにしました。

保護者への説明はどのようにしましたか

年度始めの4月に、「学校と保護者をつなぐ会」（学校の教育活動を保護者に説明する会）を実施しました。その会で、2分の1成人式を行わないことを伝えました。それに対して、その場でも、その後も反対意見はありませんでした。

子どもたちの反応はどうでしたか

上に兄弟がいる子の中には、小さい頃の写真を準備していた子もいましたが、早い段階で子どもたちに説明したので、特に2分の1成人式をやりたい」といった意見はありませんでした。

2分の1成人式をやめることで、どんなよさがあると思いますか

まずは、教員の負担軽減につながります。それと同時に、2分の1成人式に向けた合唱の練習や準備がなくなることで、子どもたちの負担軽減にもつながっていきます。また、保護者にとっても、2分の1成人式は通常の授業参観とは違い、「参加しなければいけない」「見に行っておかないと子どもがかわいそう」という意識が強く、無理に仕事を調整して参加している方もいるかもしれないので、保護者にとっても負担軽減につながるのではないかと思います。それぞれの負担軽減につながることもそうですが、総合的な学習の時間が、本来の流れで学習がすすむこともよさだと思います。

最後に何かありますか

以前から、保護者にはあらゆる機会に、学習指導要領の改定に伴い学校が大きく変わっていくことを伝えてきました。学校を変えるのは今がチャンスであり、このタイミングを逃してはいけないと思います。今なら保護者も理解してくれると思います。

3 考察と提案

(1) 考察

学校で行うすべての教育活動に意義のないものはない。今回取り上げた2分の1成人式も同様である。ある教員が、「子どもたちは2分の1成人式を成功させるという目標に向かってよくがんばっていました。…略…4月からは高学年になるんだ、という意識が高まり成果が表れていました。」と、2分の1成人式の意義を答えているとおり、これまでの10年を振り返り、自分自身の成長や多くの方の世話になっていることに気づいたり、これからの自分について考えたりすることは有意義なものであると教員の多くは考えている。しかし、3校のインタビューを試みて、実施の方法等は学校によって違いはあるが、共通して聞かれたのが、家庭環境が複雑になってきている中で、人権への配慮が難しくなっていることや、これまでのように2単位時間を使っての実施は、教員だけでなく、子どもの負担も大きいということである。また、当然のことかもしれないが、簡略化、もしくは実施をやめたことにより、「教員の負担軽減につながりました。…略…保護者にとっても負担軽減になっていると思います。」という回答からも負担が大幅に削減されたことが明らかとなった。インタビュー調査の前に行ったアンケート調査では、実施している最も大きな理由として、「保護者が楽しみにしているから」と回答があった。「保護者に子どもの成長や頑張っている姿を見てもらいたい」、「保護者の期待に応えていきたい」という思いは当然あると思うが、「保護者の楽しみのために、学校行事はあるのか。」「人権の視点から見直しについて議論することが大切ではないか」という意見もある。

実施する、しないについては、賛否両論があり難しいことではあるが、保護者の意見や思いを受け止めつつも、積極的な議論が必要ではないかと考える。

(2) 提案

ここまで2分の1成人式について、様々な角度から教員の考えや思いを拾い上げてきた。一定のねらいをもって子どもたちの成長を願い、保護者とともに成長の喜びを共有する一つの行事として実施してきたことが伺える。

一方人権の視点と、子ども、保護者、教職員の負担から見直しを図っている学校もあることがわかった。そこで以下の3点を提案し、まとめとする。

①人権への配慮の視点から考える

全国の児童相談所が2017年度に対応した18歳未満の子どもへの虐待件数は13万3778件で、調査を始めた1990年度から27年連続で増え続けている。また、厚生労働省「2016年国民生活基礎調査」によると、現在子どもの貧困率は、13.9%といわれており、これは子どもたちの7人に1人が「貧困」であり、さらに絞るとひとり親家庭では、2人に1人に及んでいるといわれている。このような家庭環境の中で育つ子どもたちにとっては、「親に感謝をする」という2分の1成人式を素直に理解し、受け止めることは可能だろうか。こういった現状を踏まえ、例えば、「親への感謝の手紙を書くのはやめる」だとか、「周りの人に感謝するのではなく、あくまでもその子自身の成長を感じるために行う」など、校内で議論を重ね、実施方法を変更してきた学校もある。家庭環境の複雑化、家庭環境の多様化がすすんでいることを踏まえ、実施する場合には人権に配慮した十分な議論が必要ではないだろうか。

②子ども、保護者、教員の負担軽減の視点から考える

時間がない中で、よりよい式にしようとするため、昼休みや放課後の時間、総合的な学習の時間の一部を使って準備や練習をしていると答えている教員もいる。このことは、昼休みなのに外で遊ぶことができない、一息つく間もなく一日を過ごしているなど、子どもたちにも大きな負担になっていることは否定できないだろう。保護者にとっても、2分の1成人式は参加しなければいけないもの、参加しなけ

れば子どもがかわいそうといった意識をもっており、共働き世帯では、休みを取ることができず困ってしまうなど負担を感じる人もいないではないか。教職員にとっても、事前の計画づくりや準備、練習等にかなりの時間を費やし負担を感じている人もいだろう。

そこで、2分の1成人式を継続していこうと考えている学校においては、子ども、保護者、教職員の負担軽減を視野に入れ、すでに実践している学校のように、限られた時間で練習準備ができる範囲で実施するとか、参観会の日数は増やさず2分の1成人式を参観会の中で行うなど、工夫・改善のための議論を重ねることが大切ではないだろうか。

③教育活動全体的から考える

2分の1成人式に限らず、学校の教育活動は保護者からの期待も大きい。2分の1成人式を継続している学校では、インタビューの中にもあるように「保護者が楽しみにしているから」「保護者に子どもたちの成長やがんばっている姿を見てもらいたい」といった思いをもっている教職員もいるし、「もしやめるとすると保護者から苦情がくるのではないか」「今まで継続してきたことを自分が担任した時にやめてしまうことはできない」と心配する教職員もいる。

考察にもあるように、学校で行うすべての教育活動に意義のないものはない。しかし、今子どもたちにとって必要なことは何か、限られた時間の中で学校として最も力を注ぐのは何かといったことを議論することが大切ではないか。2分の1成人式だけを取り上げ、実施の是非や実施方法の工夫等を話し合うのではなく、教育活動全体を視野に入れた話合いが求められる。



現場にあったOJTとミニ研修を

1 現状と課題

(1) 現状

教育基本法第9条に、「教職員は絶えず研究と修養に努めなければならない」と規定されているように、私たちにとって研修は責務である。法律上の押さえも大事だが、それ以上に大事なことは、授業を含め教育活動をよりよいものにするための努力であり、子どもたちの教育に携わる教職員としての責任であるといえる。

次期学習指導要領の完全実施を間近に控えた今の学校現場には、教職員として学ばなければならないこと、やらなくてはならないことが山積している。一方では、教職員の多忙な勤務の状況が大きな問題となっている。小学校教員の約35%、中学校教員の約60%は、厚労省が定めている過労死ラインを超えての勤務となっている。

学校現場から、「研修しなくてはならないことが山ほどある」「次期学習指導要領を勉強しないと…」「今でも帰宅は9時過ぎなのに…」「外国語の授業のための研修会に参加しないと…」「教職員全体での研修時間の確保がとても難しい」などの悲鳴が聞こえる。

(2) 課題

- ・教職員一人一人の力量向上を、多忙な学校現場の中でどう図るか。
- ・教職員の年齢構成に偏りが見られる学校現場の中で、経験年数が少ない教職員の学ぶ場をどうつくっていくか。

2 研究の概要

(1) 研究の目的

研修の確保が困難であり、教職員の年齢構成に偏りが見られる現場において、OJTやミニ研修をによってこれらの問題を改善できるのではないかと考え、OJTやミニ研修についてのインタビューを元にした研究をすすめることとした。

※OJT（On-The-Job Training）とは職場の上司、先輩が部下や後輩の指導を行う教育訓練のこと

(2) 研究の方法等

地区の中で、OJTが機能している分会やミニ研修を活用している分会を訪問し、推進役と参加者にインタビューをする。

(3) 研究結果

A市中規模校の実践

B小学校のOJTの状況はどんな感じですか

わたしたちの学校はうまくいっています！

40代 研修主任兼 学年主任	はじめは、校内で意図的な研修をすすめていきたいと思ったんですけど、私を含めベテランの先生は、普段から教えるべきところは教えているし、見て学んできた人が多いから、改めてかしこまってやる必要はないんじゃないかという感じだったんですね。その分、放課後の時間とか使ってざっくばらんに話をするようにしています。 <u>主任と若手が組むような構成になっているから、OJTを意識しなくてもできるようになっていて、その中で、伝えたいことは伝えてく。</u> 若い子の愚痴も聞き出すようにしているかな。1対1だと教えやすいし聞きやすいというのがあるかもしれません。授業でつまづいてる部分も聞いてあげられるので、アイデアも教えやすくなる。また、若手に学ぼう精神があって、聞かなくてもまねしようとしてくるから、自然にそういう話になっていくし、難しいことでもやりたいて相談されれば、こうしてみればという支援もしてあげられるかな。
----------------------	--

力量向上のために普段心がけていることはありますか

聞くって大事ですよ

20代 児童会担当	<u>ベテランの先生方に、授業のことや生徒指導のことも積極的に聞くようにしています。</u> 主任の先生や分掌の長の先生とかにも事前にいろいろ聞いて、それを自分なり生かして実践するようにしています。 <u>どの先生もどンドン聞いていけば話してくれるし、職員室で聞けるような雰囲気もあります。</u> 主任の先生が頼りになって、引き出しも多いのでいろいろ聞けます。特別活動でも、子どもと考えていく前に、自分の知識を増やしてから子どもと話していくと全然違ってきます。自分の中で聞くという姿勢は大事にしたいなと思っています。
--------------	---

B小学校のOJTが上手く機能している秘訣って何かあるでしょうか

年齢構成と雰囲気の良さかな

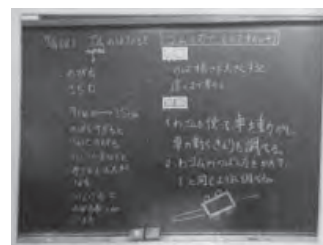
40代 教務主任	<u>学年のメンバーを見ると、ベテランの主任さんと若手ということで、バランスがとてもいい</u> と思いますし、若い先生はアイデアがすごく豊富で、すごくよく動きます。でも授業はアイデアだけでやるものじゃないから、そこを、主任の先生の指導観というか今までの経験を踏まえて、ちょうどいい具合に学年経営がされているなと感じます。 また、 <u>管理職が明るい雰囲気、みんなが話し合える雰囲気をつくってくれている</u> ので、そこも大きな点じゃないかなと思います。職員室の環境もきれいで、机の上をきれいにしていて、ノートパソコンを閉じて話をするとか垣根がないから話しやすいし、職員室で仕事しやすいっていう雰囲気につながっていると思います。
-------------	---

C市中規模校の実践

OJTについて普段感じていることはありますか

意識的に研修の機会をつくる必要があるのかな

40代 教務主任兼 C市理科 指導員	これまでは隣のクラスの先生に、今自分が授業で悩んでいることとか、実践してみた成果なんかを共有する場面というのが、日常的にあったのですが、単学級の学校が増えてきて、自然発生的な研修ができていないなということを感じていました。 <u>若い人とベテランをつなぐ層が少ないので、意識的に研修の機会をつくっていかねばならないと考えました。</u>
-----------------------------	--



どのような実践をしたのですか

イントラネットもOJTの手段の1つ

40代 教務主任兼 C市理科 指導員	学校内に教員が7人しかいないので、C市が一つの学校ということで、C市の中での研修の機会をつくっていかなくちゃというふうに思っています。そこで、C市の理科の指導として、定期訪問だけではもったいないので、 <u>他校の若い先生と自分で、イントラネットを使って、毎月一本、授業の板書を交換し合っています。</u> 遠方の方ともOJTをやっていくことは、これからは必要になってくるのかなと思います。
-----------------------------	---

がんばらなくてもできるミニ研修は効果的

40代 教務主任兼 C市理科 指導員	夏休みに、ミニ研修ということで、先生方の得意なところを紹介してもらうという形で、1つ20分程度のを6本やりました。例えば「教育機器の使い方について」の時は、iPadをみんなで実際に手に取ってもらって「こんなふうに使いますよ」という感じで20分やりました。この研修は、「一切準備しない」という約束で、例えば教材室とか体育館倉庫とか音楽室などに行って、みんなで紹介し合いました。がんばらなくてもできるんですよ。 <u>がんばらないとできないものって、多分続かないと思うんですよね。がんばらなくてもできるというやり方を見つけていくのが大切なのかなって思いました。</u>
-----------------------------	--



やっぱり人間関係と時間の確保は必要な

40代 教務主任兼 C市理科 指導員	職員室の人間関係がうまくいってるからこそできるってことかな。それを楽しみながらできる先生たちじゃないと、忙しいことがまた新たに加わったというふうになっちゃう。多忙感になっちゃうので、楽しんでやるというのが1つキーワードだと思います。日課を見直したりして、やっぱり先生たちの働き方を、日課を含めて変えていかなくちゃいけない。 <u>時間をつくれないう限りは、こんなミニ研修もなかなかできないだろうって思う。</u>
-----------------------------	--



ミニ研修に参加してみてどうでしたか

50代 音楽主任	隠れたお宝をみんなで山分け 夏って備品点検するので、ああ、こんなものが隠れてたんだっていうのを見つけたとか、これあるのにあんまり使われてないよなあっていうのも、音楽担当として思ったりする。 <u>本当に簡単でいいからっていう話だったので、とりあえずみんなで音楽室行こうみたいな。こんなボタンがあって、これ押すと伴奏が弾けなくても使えるからとか、いろいろな話もできたので、そういう面でよかったかな。仲間内なので、本当に素朴なことも聞けるのもよかった。</u>
40代 中堅教員	学んだことは即実践！ 写真を撮ったのを大きくするくらいはできたけど、こういうやり方をすると、コードをつながなくても、子どものそばに行って、ノートをパシャってやってもいいし、動画もできるよっていうことを教えてもらって、2学期に生かしたことがあったと思います。普段子どもがいる時には、皆さん忙しいから、聞きたくても聞けないとか、ちょっとよくわからないからこの方法はカットして、違う手だてでやろうって思ってたようなことが聞けたから、勉強になりました。私は、早く帰らなくちゃいけないって、放課後ゆっくり時間がもてないから、 <u>夏休みのこの時間っていうのがよかった。2学期から使ってみようと思って、iPadとテレビ、使うようになりましたね。</u>
40代 中堅教員	アットホームな雰囲気情報共有 この学校に来て4年目なんですけど、それでも算数の備品とか知らない物もあって。同じ備品でもある先生はこういう領域で使ったよとか、全然違う使い方してたんだっていう発見がありました。教育機器の時はD先生が担当だったんですけど、途中から教頭先生が詳しいから話してくれて、 <u>誰が教える教えられるっていう関係じゃなくて、アットホームな感じで、みんなで話せたのがよかったですね。</u>

サイコロ研修とは

校内の全体研修とは別で、有志が気軽に授業を見合う研修である。授業者を決める時に、メンバーがサイコロを振り、一番大きい数字を出した者が授業を行うというルールだったので、サイコロ研修という名前になった。授業者は、その時に一番見てほしい授業（意見をもらいたい授業）を公開し、都合のつく教員が自由（部分参加も可）に参観するようにした。

どういきっかけて始まった研修ですか

毎週授業を見合えたら楽しいね

30代 きっかけを 作った教員	職員室の中で、「 <u>毎週授業を見合えたら楽しいね。</u> 」っていう感じで始まったと思います。勉強になるねっていう感じです。自分はF先生やG先生の授業を見て学びたいと思いましたし、自分のやりたい授業というのを見てもらって、意見もほしいなっていうのがちょうどあった時期だったので、で、サイコロを振って、誰が授業をやるかというのを決めてやりました。
-----------------------	---

サイコロ研修に参加してみてどうでしたか？

30代 きっかけを 作った教員	やっぱり勉強になりました 社会で「3枚の資料」というのを自分の課題にしてやってたんですけど、授業を見てもらって、資料の難易度というか、あまりにも簡単すぎると授業にメリハリがなかったりであるとか、資料が考えるに値するくらいのもだったかのかどうか、意見をもらって考えましたね。<u>これが課題なのだというのが、けっこうはっきりしましたね。</u>授業を見る側としては、<u>いろいろな教科があって、いろんな先生がいて。図工や理科、算数とか社会。劇を取り入れる社会の授業とか、おもしろかったです。</u>授業の形というかこういうやり方もあるんだなというのが勉強になりました。 サイコロ研修のよさ <u>サイコロ研修のよさは手軽さ</u>かもしれないですね。簡単な流れとか授業案みたいなのも出さなくてもいいし、形式的な事後研でもないから、見てもらって、好き勝手言えるし、好き勝手言ってもらえるっていうのは、回りくどくないし、よかったですよね。
50代 ベテラン 教員	おもしろかったよね みんなでこう、誰がやる、誰がやらないって、授業がどうこうってのもあるけど、<u>雰囲気がよくなるっていうのが、まず1つあったかな。</u>仲良くなれたなっていうのもあると思います。自分が当たった時には、他の人たちよりも経験があったので、それなりにちゃんとしたのを見せなきゃいけないと思ったので、指導案まではいかないけど、簡単な流れとかはちゃんと作って、少しは参考になったんじゃないかなと思います。見る方は、やっぱりまだまだ足りないと思うところはあったので、そういうアドバイスができるよい機会になったと思うし、また、研究授業とは違って、ざっくばらんに細かいことまでいろいろ話のできたので、よかったんじゃないかと思います。 見に行く時間と言い出しっぺ ただ、<u>課題として、見に行く時に自分のクラスを自習にしなければならないっていうのは、一番問題じゃないかな。</u>数をこなせば、おもしろいし、勉強にもなるけど、その分自習の時間が増えてしまう。空き時間を上手く利用してできるのであればいいけど、そういう状況ではなかったの。あとは、言い出しっぺ。そういう雰囲気を作ってくれる人、そういう人がいたっていうのが大きいね。



40代 中堅教員	一緒に参加できる楽しさとか喜びの方が大きかった 決まりきった型にはまった校内研修をやるよりは、ああやって職員室でわいわい先生たちで、ああでもないこうでもないってやってもらったのはありがたかったですね。すごく気が楽で、やんなきゃいけないっていう感覚じゃなくて、一緒に参加できる楽しさとか喜びの方が大きかったですね。始めは消極的で、見る方でね。先生たちがいろいろ提案するじゃないですか、チャレンジするじゃないですか、それがどうだったのかを見るのが、子どもたちにとってどうだったのか、あと、それを見るH先生とかI先生だったり、どういうふうに評価するのもすごく楽しみでした。参観できない低学年の先生とか、消極的だった私とかも聞いているわけですよ、職員室でわあわあやってるのを聞いているだけでもすごく勉強になった。 日頃の授業をふり返る場 自分がやる番になると、ある意味緊張感があって、ちゃんと考えなきゃいけないなっていう、そういう場。指導案とか書いてっていう堅苦しいのは、一生懸命時間もかけて練って、できて当然の授業かもしれないけど、ああいう普通の授業をどうやっているかっていうものは、ちょっとした緊張感をもてたし、日頃の授業をふり返る場にもなってよかったです。
50代 サイコロ 研修に参加 した管理職	型にはまった研修からの脱却 サイコロ研修のおもしろさというのは、管理職から見た時に非常に魅力的なものがあるなと感じています。校内研修をすすめて、先生方の授業力を向上させようという思いで、計画を立ててすすめていくわけですけど、このサイコロ研修という新たな手法が入った時に、これは予定調和を脱却するような起爆剤になるんじゃないかという思いを管理職として抱きました。 サイコロ研修のよさ 1つ目は、型にはまった指導案もなく、ちょっと肩の力を抜いて、リラックスした中で授業づくりに励むことができる。 2つ目は、いつ自分の番になるのかわからない、サイコロ次第という遊びの感覚がわくわくドキドキ感を増幅させて、それがアイデアを生み出す原動力となります。授業に対する集中力も飛躍的に高めることができると考えています。 3つ目は、参観者の視点ですが、その先生が工夫していることと、子どもの反応のみに視点を当てて授業を楽しむことができるということ。失敗してもかまわない、大事なのはチャレンジする精神、あとで感想を聞くのが本当に楽しみです。 仕事をすることの喜び 同じ時間と場、思いを共有した人たちが対話することで、幸せな気持ちが生れます。時間と場所だけでなく、心も共有した人の中に、生まれる幸せな気持ち。これは、仕事をすることの喜びにつながります。私たちは仕事をやらされているものと思いがちですが、しかし、思いを共有することによって、それが逆に幸せ感に変わることもあります。そんなところが、このサイコロ研修の優れたところ。今を打ち破る起爆剤になるものだと考えています。

3 考察と提案

(1) 考察

B小学校でインタビュー後、校長先生と話をした際「ベテランの学年主任と若手が学年を組んでいて、普段から自然な形でOJTがすすめられているという点が強みだ」と校長先生が話していたのが印象的だった。また、先生方も普段から教えるべきところは教えているし、改めてかしまってやる必要はないんじゃないかと感じている。B小学校では、主任が確かな知識と技術をもっていて、若手がどんどん聞いて吸収する姿勢がある。このように、円滑な人間関係のもと、自然な形ですすめられるOJTがベストであると思われるが、B小学校のように自然とOJTがすすんでいる学校は、恵まれた環境であると考えられる。

一方、教職員の多忙な勤務の状況を考えると、C市の小規模校の40代の教員の「がんばらなくてもできるやり方を見つけていくことが大切だ」というように、日ごろから気軽にできるミニ研修を意図的に取り入れていくことも有効である。参加者のインタビューにもあったように、円滑な人間関係があれば、ざっくばらんにいろいろなことを聞くことができ、楽しい雰囲気の中、すぐに実践できる技術を習得することも可能である。しかし、そこには、意図的に研修の計画を立て、働きかける人材が必要である。自然なO

J Tが困難であれば、意図的に行う研修が必要となる。また、小規模校の多いC市の実践のように、インターネットを有効活用する研修も効果的であるだろう。

E市小規模校のサイコロ研修という実践は、自然発生的であり、そこに遊び心があったことが型にはまった研修からの脱却につながったのだと考えられる。サイコロ研修のきっかけをつくった30代教員は「サイコロ研修のよさは手軽さかもしれないですね」と、また、50代のベテラン教員は、「みんなで誰がやるとか…略…雰囲気はよくなるってことがあったし、仲良くなれた」と、サイコロ研修の効果を答えている。仕事をする喜びを参加者も自然と感じていたということは、働きやすい職場、力を発揮しやすい職場になっているのだと思う。時間、場、思いを共有したくなるような、遊び心のある研修が私たちの働き方改革のヒントなのかもしれない。

(2) 提案

インタビューを通じて、いくつかの共通点やOJTや研修を充実させるためのヒントが見えてきた。学校現場に、教職員一人一人の力量向上を図るとともに、若手教員が学ぶ場をつくるために、インタビューの回答から伺うことができる共通点やヒントをまとめることで、提案としたい。

○OJTをすすめるにあたって必要な条件とは…

OJTによる研修が上手く機能しているA市B小学校の40代の教務主任が、「学年のメンバーを見ると、ベテランの主任さんと若手ということでバランスがとていい」と回答している。また、「管理職が明るい雰囲気で、みんなが話し合える雰囲気を作ってくれているので……」と付け加えている。同じ学校の40代の研修主任も、「主任と若手が学年を組むようになっていて……」と回答し、互いの関係性が良好であることを回答している。

このような回答から、OJTをすすめるにあたって必要な条件として次の2つが考えられる。

- ・教える側と教えられる側の人数や年齢構成のバランスが大事であること
- ・職場内の円滑な人間関係が大事であること

○ミニ研修を継続・充実させるために必要なことは…

E市のある学校ではサイコロ研修という名称でミニ研修を実施している。30代の若手教職員から50代のベテラン教職員まで、「勉強になりました」、「一緒に参加できる楽しさと喜びが大きかった」「サイコロ研修の良さは、手軽さかもしれないですね」と、このサイコロ研修を肯定的にとらえていることが伺える。

50代でサイコロ研修に参加した管理職は、「このサイコロ研修という新たな手法が入ったときに、これは予定調和を脱却するような起爆剤になるんじゃないかという思いを抱いた」と言っており、さらに、「ちょっと肩の力を抜いて、リラックスした中で授業づくりに励むことができる」「これは、仕事をすることの喜びにつながる」と答えている。

形はどうであれミニ研修を継続・充実させるために必要なこととして次の3つが考えられる。

- ・極力準備をしない、時間に余裕があるときに行うなど、無理のない環境で行うこと
- ・円滑な人間関係が大事であること
- ・参加できる人が無理のない範囲で行うこと

○働く喜びを感じるようにするためには……

40代の中堅教員は、サイコロ研修に参加してみんなで一緒に参加できる楽しさと喜びが大きかったことを、サイコロ研修の良さとして挙げている。また、前述の50代でサイコロ研修に参加した管理職は、「同じ時間と場、思いを共有した人たちが対話することで幸せな気持ちが生れます」と回答している。サイコロ研修を通して、自校の教職員が教師として幸せな気持ちや時間をもったことを喜んでいる。

研修は、私たち教職員の責任であり、とりくまなくてはならないことではあるが、OJTによる研修、サイコロ研修のようなミニ研修が、力量形成や授業のスキルアップだけでなく、働く喜びや共に学ぶ楽しさにつながっていることは確かなようである。

力量向上のための研修等が、働く喜びにもつながるようにするための条件として2点を挙げる。

- ・教職員が、時間、場、思いを共有すること
- ・肩の力を抜いた遊び心のあるリラックスした研修を創造すること

学級経営参考資料をめぐって

1 現状と課題

(1) 現状

学級は、子どもにとって学校生活を送るベースキャンプのようなものである。子どもたちが教職員との信頼関係をつくり、子どもどうしのよりよい人間関係を育むために、学級担任には充実した学級経営が求められる。学級担任は、実践と研修を繰り返し、学級経営力を身につけていかなければならない。

学級担任の仕事として、質的にも量的にも1年の中で最も多忙を極めるのは、年度始めの4月である。学級の組織作り、子ども一人一人の実態把握、子どもとの信頼関係づくりや子どもどうしの人間関係づくりなど、年度始めの過密なスケジュールのなかで、きめ細かい指導が求められる。また、子どもにとっても変化が多く、負担が大きい時期でもある。学級編制による集団の変化だけでなく、学級担任の経営によって、子どもたちは、不安や戸惑いを感じたり、学校生活の意欲を失くしたりすることもある。

現在、学校職員の年齢構成は、中堅層の教職員の割合は減少し、若手教職員の割合が大きくなっている。中学校においては、学年部の担任全員が20代ということもよく聞く話である。経験の浅い若手教職員にとって、力量向上のために大きな役を担っているのが、先輩教員の存在である。先輩教員の学級を見たり放課後の職員室で話を聞いたりするなかで、学級経営の心構えや技術を学ぶのである。しかし、学校の現状を見ると、お互いの忙しさからか、相談したり、教えてもらったりという時間と場がもてないという状況である。職員室や教室での日ごろのコミュニケーションをとおして、学級づくりを学ぶという機会が少なくなっている。

(2) 課題

- ・若手教職員が学級経営を学ぶ機会が減少している。若手教職員が学級を経営する力をつけるための手立てを考えたい。
- ・業務量が増大する学級担任の多忙解消が急務である。特に年度始めの学級づくりにおける教員と子どもの負担を軽減させたい。

2 研究の概要

(1) 研究の目的

ある中学校では、共通理解、共通実践のために「学級経営参考資料※」を用いて足並みを揃えた学級経営を行っている。目的は、①指導の具体の統一を図る。②学級経営の具体を知るという2つである。このとりくみが学級担任の多忙解消や年度始めの子どもの戸惑いや不安の軽減、若手教職員の力量向上において、効果があるか、またどのような課題があるかを調査する。

※主に年度当初、学級や生徒会の組織づくり、清掃、給食など日常の学校生活に関する内容などについて、具体的な指導内容、方法等をまとめたもの（P31、P32 は一部抜すい）



年 組 * 清掃分担表 前期 *



年 組 教室 ()	班 班 班	ほうき (3)	(廊下) (中央) (窓)
		ぞうきん (6)	(廊下) (中央) (窓)
廊下 () 女子トイレ前～中央廊下	班	黒板 (2)	
		棚、ロッカー水ぶき (1)	
		窓ふき	
		ベランダ清掃・ゴミ出し (2)	※火曜：窓、木曜：ゴミ出し、金曜：ベランダ清掃
体育館内 ()	班	ほうき (1)	
		ぞうきん (2)	
		玄関 (2)	
体育館トイレ ()	班	玄関外 (2)	
		階段 水ぶき (2)	
		男子トイレ (2)	
体育館外 ()	班	女子トイレ (2)	
		多機能トイレ (1)	
		ドアのレール、窓 (2)	
		くつ箱 ほうき (1)	
	班	くつ箱 水ぶき (1)	
		手洗い場 (1)	

黙働で清掃しよう！

○=清掃リーダー ○=サブリーダー

清掃の仕方を確認しよう！

教室	廊下	体育館トイレ
①ほうきの人が窓側、中、廊下側をロッカー側から黒板側へゴミを掃く ②ゴミを掃き終わったら、ぞうきん隊が3回を目安にマス目を拭いていく ③教室後ろ側を掃き終わったら、机を後ろに運ぶ。運ぶ時は引きずらない。ほうきの人は前にゴミを掃き続ける。 ④前も同様に清掃をする (ほうきで掃く→拭く) ⑤ほうき、ぞうきん担当全員で机を元に戻す 黒板清掃：①黒板消しをきれいにする ②消す ③チョーク受けを黒板消しできれいにする ④短いチョークは捨てる ★予定黒板のチョーク受けも！ 棚拭き：水拭きで棚を全て拭く。ロッカーの整頓。 ベランダ清掃：土間ほうきで掃く→ちりとりでゴミをとる 配膳台：①水ぞうきんで拭く ②洗剤で泡立てて磨く ③スポンジで泡を吸い取りながら拭く ④水ぞうきんで拭く ⑤空ぞうきんで拭く	①女子トイレ前からほうきが掃いていく 掃く場所は、女子トイレ前～男子トイレ前～中央廊下 ②ほうきが掃いた後、ぞうきんでかた拭きをする。	①ほうきで床を掃いてゴミをまとめる ②ビニール手袋をして、すみずみまで水拭きする。 ※水拭き場所：床、便器、トイレのふた ③トイレットペーパーの補充、ゴミをまとめる ※木曜にはゴミを必ず捨てる (トイレットペーパーは、各個室1つ余分がおいてある状態にする) ④洗面台、鏡をきれいにする



体育館内	体育館外
【玄関】 ①ほうきで掃く ②ぞうきんで拭く ③靴箱を拭く ④マットを外で叩く 【玄関外】 ①土間ほうきで掃いて外に出す ②玄関の窓を固く絞った水拭きで拭く 【階段】 ①上から下に向かってほうきが掃く ②ぞうきんで水拭きする	【窓・ドアのレール拭き】 道路側、校舎側で分担 ①ドア、窓のレールを全て水拭きする ②固くしぼって窓を水拭きする 【くつ箱】 ①くつ箱の一番上から小ぼうきで掃く ②水拭きで仕上げる ※ウッドデッキのゴミ拾いも 【手洗い場】 ①水に濡らしたたわしに洗剤をつけ、磨く ②水で流す 東側、西側どちらも行う

清掃の流れについて

- ①6時間目が終わったら、イスを机を上げ、前に持ち上げて運ぶ。運び終わったらすぐに着替えをして、班ごとにクラスで並び。
- ②清掃用具を持って並び、整美委員の号令で全員で挨拶をする
- ③清掃場所へ移動し、8分全く話さず、集中して自分の場所をきれいにする (早く終わった時は仕事を探す)
- ④清掃終了後、清掃場所で集まり、リーダーの号令で終わりの挨拶をする

給食の分担

食は命！！

班	担当	氏名	仕事内容
班	配主食		・4時間目終了後、きれいに手を洗い、素早く着替える。(エプロン、三角巾、マスク着用) ・分量に注意しながら平等に手早く分けきる。
	運主食		・4時間目終了後、すばやく配膳室に主食を取りに行く。給食終了後、配膳室に戻す。 ★班員の食事を席に運ぶ。(主食) ※残飯は特殊処理班に依頼！！
	特殊処理		・ご飯の残飯、パンをルールに合わせて処理を行う。残飯のビニールは皿カゴに入れる。 ・お助けマンの仕事を手伝う。(デザート等の配布)
	配お助けマン		・スプーン、デザートなどを配る。 ★班員の食事を席に運ぶ。(菜皿・おわん)
班	配食缶		・4時間目終了後、きれいに手を洗い、素早く着替える。(エプロン、三角巾、マスク着用) ・分量に注意しながら平等に手早く分けきる。
	運食缶		・4時間目終了後、すばやくコンテナに食缶を取りに行く。 ・給食終了後、正しいコンテナの場所に返却する。 ★班員の食事を席に運ぶ。(主食)
	配膳台準備		・4時間目終了後、いちばんはやく行動！配膳台を出し、きれいに水ぶきをする。 ★班員の食事を席に運ぶ。(菜皿・おわん)
班	配フライ缶		・4時間目終了後、きれいに手を洗い、素早く着替える。(エプロン、三角巾、マスク着用) ・分量に注意しながら平等に手早く分けきる。
	運フライ缶		・4時間目終了後、すばやくコンテナにフライ缶、菜皿を取りに行く。
	運菜皿		・給食終了後、正しいコンテナの場所に返却する。 ★班員の食事を席に運ぶ。(菜皿・おわん)
	運牛乳(副食)		・4時間目終了後、すばやく配膳室に牛乳を取りに行く。 ・デザートがある場合は牛乳と一緒に運ぶ。 ・牛乳配り係りの人が配りやすいよう持って運ぶ。
	配ストロー		・ストローを配る。風で飛ばされないように注意する。 ★班員の食事を席に運ぶ。(主食)

班	担当	氏名	仕事内容
班	配主食		・4時間目終了後、きれいに手を洗い、素早く着替える。(エプロン、三角巾、マスク着用) ・分量に注意しながら平等に手早く分けきる。
	運飯椀		・4時間目終了後、すばやくコンテナに飯椀を取りに行く。 ・給食終了後、正しいコンテナの場所に返却する。★班員の食事を席に運ぶ。(主食)
	運トレー		・4時間目終了後、すばやくコンテナにトレーを取りに行く。 ・トレーをクラス全員と先生の机に置く。 ・給食終了後、正しいコンテナの場所に返却する。
	配膳台片付け		・給食終了後、残りカスなどをティッシュで拭きとり、きれいに水ぶきする。 ・配膳台にカバーをかけ、教卓など元の場所に戻す。 ★班員の食事を席に運ぶ。(菜皿・おわん)
班	配食缶		・4時間目終了後、きれいに手を洗い、素早く着替える。(エプロン、三角巾、マスク着用) ・分量に注意しながら平等に手早く分けきる。
	運汁椀		・4時間目終了後、すばやくコンテナに汁椀を取りに行く。 ・給食終了後、正しいコンテナの場所に返却する。★班員の食事を席に運ぶ。(主食)
	運お茶		・4時間目終了後、すばやく配膳室にお茶を取りに行く。 ・給食終了後、正しいコンテナの場所に返却する。★班員の食事を席に運ぶ。(菜皿・おわん)
	配牛乳		・運搬係が持ってきた牛乳を配る。
班	片付けのプロ		・「ごちそうさま」の前に、食器かごを片付けの形にセットする。(12:55までに完了) ・トンク、お玉等をサラダ缶に入れる。(トンク、お玉は交互に！入れ方注意！) ★班員の食事を席に運ぶ。(主食)
	配サラダ缶		・4時間目終了後、きれいに手を洗い、素早く着替える。(エプロン、三角巾、マスク着用) ・分量に注意しながら平等に手早く分けきる。
	運サラダ缶		・4時間目終了後、すばやくコンテナにサラダ缶、菜皿を取りに行く。 ・給食終了後、正しいコンテナの場所に返却する。 ★班員の食事を席に運ぶ。(菜皿・おわん)
	運菜皿		・給食終了後、正しいコンテナの場所に返却する。★班員の食事を席に運ぶ。(菜皿・おわん)
	先生給食		・先生の給食を作る。 ★班員の食事を席に運ぶ。(主食)
班	ゴミ処理のプロ		・デザート、ストロー等のゴミ袋をセットする。 ・配膳後に袋の準備をする。★班員の食事を席に運ぶ。(主食)

【給食委員】[][] ※ 12:30 教室入室厳守！！給食委員、日直班呼びかけ！！
①呼びかけ。②「いただきます」「ごちそうさま」の号令。③衛生チェック表の記入。④コンテナの移動 ⑤牛乳バック洗浄等。

(2) 研究の内容

①内容

学級経営参考資料の①活用メリット②活用上の課題について、若手とベテラン層の教員にインタビューによる聞き取り調査を行った。

年度始めの職員会議のなかで、全職員で共通理解を図り、その後各学年で実態に合わせてアレンジを加えて、学年で足並みを揃えた学級経営を行う。子どもの実態や子どもの意見を取り入れ、年度途中に改善していくこともある。

あくまで基本の型であり、必ずやらなければならないという訳ではない。学年の実態に合わせて工夫したり改善したりして活用する。

②調査方法

若手教職員とベテラン教職員にインタビューし、学級経営参考資料のメリットとデメリットについて調査した。

(3) 研究の結果

学級経営参考資料を活用しているなかでのメリットは何ですか

初任者には助かる！

20代 女性 学級担任	<u>学年が変わるときの混乱がなくなった。</u> 教職員も生徒も共通の意識で、学校生活を送ることができている。学級委員を決めたり、生徒会を組織したりする際、とても参考になった。
20代 男性 学級担任	<u>初めて学級担任となったときに、とても参考になった。</u> 組織の決め方や掲示づくりにも、そのままデータ使えるので、効率的に仕事をすすめることができた。学年が上がると生徒から「こうしたい」といった自治的、主体的な意見が出てきた。
20代 男性 学級担任	初任校では、こういった資料がなかったので、とても苦労した。 <u>初任者にとっては、とても助かる。</u> 今は子どもの実態に合わせて、工夫をすることもできている。
50代 女性 学年主任	年齢層のバランスが悪く、先輩教員から教えてもらいながら自分で考えて学級経営をする風土が現場にはない。そのなかである程度の型があることは、 <u>若い先生方にとって大きな助けとなっている。</u> 変化に弱い生徒が年度始めに崩れることが少なくなった。
40代 男性 生徒指導	学年が上がるなかで、生徒からよりよくしていこうとする話合いがされるなど、生徒の自発的な動きにつながっている。 <u>出張などで担任が不在のとき、誰が学級に入っても混乱がなくてよい。</u>

学級経営参考資料を活用しているなかでの課題は何ですか

自主性・主体性が育たない？

20代 女性 学級担任	自分は、経験が浅く、指導の具体がわからないことが多く、つい、 <u>資料に頼りすぎてしまう部分がある。</u> 係で言えば、自分で1つ1つ考えながらつくった訳ではないので、把握しきれていないことがある。
20代 男性 学級担任	子どもは自分の役割を把握しやすいのだが、逆にそれ以上のことをやらないということもある。学級経営参考資料ありきではなく、子どもたちの主体性や <u>自主性を伸ばせるように活用しないといけないと感じている。</u>
50代 女性 学年主任	<u>もう少し自由にやらせてほしい</u> と感じている先生がいるかもしれない。 4月の提案のときに、じっくり話し合う時間がないので、年度末に生徒の実態に合わせて見直しをしていった方がよい。
40代 男性 生徒指導	資料の通りにやればいいと考えている若い教職員がいることも事実。 <u>本来の目的である充実した学級づくりのために活用してほしい。</u> 資料はあくまで最低限の土台であるので、生徒が自発的に工夫していけるようにしなければならない。 <u>柔軟に生徒の主体性を重視して活用すべき。</u>

学級経営参考資料の今後の活用について

43 歳
男性
生徒指導

始めは教員から提案してきたものであるが、学校の実態も変化している。上級生になるにつれて、生徒が自発的に動くことが多くなる。学年が変わるときなどに、生徒の意見を取り入れて、バージョンアップさせていきたい。

3 考察と提案

(1) 考察

インタビューに答えた教員のほとんどが、学級経営参考資料の活用効果について概ね高い評価をしている。若手教員は、「初めて担任になったとき、とても参考になった」「初任の学校にはこういう資料がなかった。若い教員にはこういう指導資料はとても参考になる」というように、経験の浅い教員、学校を異動したばかりでその学校のやり方等がわからない教員には有益なものであることが伺える。経験の浅い教員、学校を異動したばかりの教員にとって、4月当初の多忙な時期に学級経営をどうすすめるかは大きな課題であり、不安でもある。この課題や不安について、一定の指導の内容や方法がわかる資料が手元にあることは、大きな安心材料であることがわかる。また、仕事の効率化にもつながると考えられる。

一方、ベテラン層の教員は、「若手教員が先輩教員に教わるという風土が学校現場になくなりつつあるので、この指導資料は若手教員にとって助かるものになっている」「学年が上がると、子どもたちが自らより良くしていこうという話し合いがされるなど、生徒の自主的な動きにもつながっている」というように、自分にとって有益であることに加えて、若手教員にはいい指導資料であること、子どもたちの自治的・自主的な態度の育成につながっていることを指摘している。ベテラン層の先生方の視野の広さや子どもたちへの教育的効果を見極めていく点はさすがであり、頼もしい限りである。

課題としては、若手教員は、「もっと自由にやりたい」「指導資料に頼ってしまう」ということを挙げている。この二つは、相反するような内容ではあるが、若手教員の素直な受け止めであると考えられる。いずれにしても、（もっと自分流でやりたい）という意味であり、（あると頼ってしまう）という反省的な振り返りである点は、ともに前向きな内容である。

ベテラン層の教員は、「資料どおりにやればいいと考えている若手が多い。本来の目的を踏まえて活用することが大切」「生徒が自発的にくふうしていけるよう……。生徒の主体性を重視して活用することが大事」「学年が上がると、生徒の意見を入れバージョンアップさせていきたい」と、若手教員に対し、励ましを込めた苦言を呈している。ベテラン層の教員は、この活用資料の本来の目的を的確に押さえていることがわかる。ベテラン層の教員の声の一つに、「学級経営参考資料について、年度当初じっくり話し合う時間がないので、年度末に1年間の生徒の実態を踏まえ見直しを図ることが大切ではないか」という意見があった。この声は、傾聴に値する。それは、年度末に実態を踏まえ、次年度を見越して見直しを図る議論をすることによって、若手教員とベテラン層教員が考えている課題の解決が期待できるからである。

(2) 提案

○教え合い、学び合う風土と文化を職員室に醸成したい

50代女性の学年主任の教員が、「若手教員が先輩教員に教わるという風土が学校現場になくなりつつあるので、……」と指摘している。このことは、学級経営の指導に限らず、ベテラン層のあらゆる面での指導力を若手教員が学ぶという点では、職員室の文化として非常に大事なことであり、できる限り今後も引き継がれていくことが大切であることと考える。「若手教員は、よく教わり学び、ベテラン層の教員は、よく教え導く」は、職員室の文化として継承していくことが必要であろう。ぜひ、指導全般にわたって、「教え、学び合う学校の風土と文化を分会内につくる」ことを組合員自身の問題と捉え考え

ることを提案したい。

○自校なりの「学級経営参考資料」を考えることで、子ども観、指導観を見直す機会としたい

この地区が、学級経営参考資料を作成し、年度当初の仕事の効率化や統一性のある指導をすすめてから、約25年が経過している。学校の中で、一定の手直し等が行われていることは容易に想像できるが、この間、学校の姿、社会の姿や考え方、保護者や地域の方々の見方・考え方等は変化している。こういった状況を踏まえ、今の学校、今の学級経営に即した学級経営参考資料を、組合員の手で作成してはどうか。組合員が作成のために議論を重ねることを通して、組合員自身が学級経営とはどういうことか、私たちの子ども観・指導観は正しいのか等について改めて見直すことができ、そのことがよりよい学級経営参考資料の作成と学級経営につながるのではないかと。



地区全体で教育活動を見直す

1 現状と課題

(1) 現状

学校現場の多忙な現状が叫ばれて久しい。2016年の文部科学省、連合総研が公表した教職員の勤務実態調査では、教職員の長時間勤務の実態が明らかとなり、メディア等でも取り上げられ、世間の注目を集めることになった。しかし、教職員の長時間勤務は今もなお続いている。各学校では行事や会議の精選に努め、教育課程を工夫、改善し、過密状態にある教育活動の見直しをすすめている。しかし、教育活動の中には、地区全体で行われている水泳大会、音楽発表会等一つの学校だけでは継続や廃止を含めた判断ができない教育活動がある。

(2) 課題

2020年度には小学校において次期学習指導要領が完全実施となる。「特別の教科 道徳」の導入に伴い、道徳の授業のすすめ方や評価も大きな課題となっている。それだけでなく、小学校3・4年生において外国語活動が導入され、小学校5・6年生においては外国語活動が教科化される。さらに、プログラミング教育や「主体的・対話的で深い学び」の実現など、学校現場に求められるものは増大している。

こうした動きにしっかりと対応し、質の高い教育を実現していくことは、当然のことながら私たち教職員には求められる。しかし、このことへの対応によって、教職員の多忙化に一層拍車がかかり、長時間勤務はさらに増大するのではないかと危惧する声がある。

地区全体で行ってきた教育活動は、一定の歴史と実績、地域や保護者の肯定的な見方もあるが、質の高い教育に向け、教材研究の時間をきちんと確保したり、子どもたちと向き合う時間をつくったりしていくためにも、そのあり方について議論していくことが重要と考える。

2 研究の概要

(1) 研究の目的

A地区では地区全体で行っている教育活動について検討する組織が立ち上がり、あらゆる角度から教育活動を見直すことになった。本研究では、議論の中心に関わった人や保護者、教職員にインタビューすることを通して、地区全体で教育活動を見直す意味について考える。

(2) 研究の内容・方法

A地区には、教職員の代表と管理職の代表が教育課題について協議する教育協議会がある。地区全体で教育活動を見直すために、2016年度に教育協議会の諮問機関として、「小学校教育活動検討委員会」が組織された。本研究では、以下の人々へのインタビューを通して、地区全体で教育活動を見直した経過を追う。

- ・教育協議会の委員
- ・小学校教育活動検討委員会の委員
- ・5、6年生の子をもつ保護者
- ・各種大会に関わってきた教職員

(3) 小学校教育活動検討委員会の立ち上げについて

2016年12月8日及び2017年1月24日に開催した教育研究会事務局会において、設置する機関の名称及び位置づけ、構成員を次のように定められた。

名 称 「小学校教育活動検討委員会」

目 的 本会の目的は、次期学習指導要領を実施する上で課題となる事がらを明らかにし、併せてA地区の小学校で行われている各種の教育活動について見直しと精選をすすめることで、完全実施に向けた条件整備のあり方を答申することである。

位 置 づ け 教育協議会の諮問機関とする。
本会から答申される内容は、教育協議会で協議されて決定する。
本会は、必要に応じて関係者に意見を求めることができる。
※なお、中学校の教育活動について検討の必要性が高まれば、同様の過程で1年後に設置していく。

構 成 員 委員の任期は2018年度の答申提出までとする。
小学校教育に精通した人材から10人以内を基本に選出する。
各行事の運営に直接関わる教職員は含めない。
管理職においても、次期学習指導要領の実施時に学校現場に在籍する年代から選出する。
B地区とC地区の人数配分に配慮する。
委員の互選により委員長及び副委員長を決定する。
会の運営を補佐する者として教育協議会事務局1人を当てるが、実質的な分担は各委員により行う。
委員に欠員が生じた場合は、教育協議会議長・委員長・副委員長の3者により協議し、必要に応じて後任を補充することができる。

〈委員構成〉

校 長 代 表 (B地区、C地区から1人ずつ)	2人
教 頭 代 表 (B地区、C地区から1人ずつ)	2人
主幹・教務代表 (B地区、C地区から1人ずつ)	2人
教 員 代 表 (B地区、C地区から1人ずつ)	2人
行 政 代 表 (市町教委より1人)	1人
研究所常務理事	1人

校長、教頭、主幹・教務、教員と、様々な立場から同数の代表者が参加し、意見反映できるようにしたこと、地区のバランスに配慮しつつ、行政の代表も参加するようにしたことは、幅広い立場から教育活動を検討していくうえで重要な点といえる。

（４）保護者への周知

検討をすすめていく中で、教職員については教育協議会後に出される教育協議会だよりや議事録をもとに、進捗状況等について周知がすすめられたが、子どもや保護者についても同様に周知をすすめていく必要があるのではないかと議論がされた。この時に各校での説明に温度差が生じることがないように、保護者に配布するたよりは教育協議会事務局が作成し、配布されたたよりをもとに各校の PTA 総会において同様の説明がされた。

（５）インタビュー

①（小学校教育活動検討委員会委員へのインタビュー）

このままじゃ学校潰れちゃうぜ…

昨年度から１年ちょっと小学校教育活動検討委員として活躍されてきて、率直に感じられていることをお話してください。

１点目は「次期学習指導要領の完全実施に伴う条件整備のあり方」ということでもいただいたテーマでしたので、次期学習指導要領というものがどんなものなのか、何を目指して具体的に学校現場に下りてくるのかというようなことを、この検討会をすすめるに当たって、自分自身でもいろいろと調べてみました。それによって理解も完全に深まったというわけではないですが、ある程度「ああ、こういうものなんだな。学校にこういうことが求められてくるんだな」というようなことをつかむことができたというのは、活動してみてもよかったなというふうに思っています。

２点目は、それを実施していくに当たって、やっぱり今学校現場がどんな問題を抱えているのかということが、より鮮明にというか、「このままこの学習指導要領が下りてきたら、学校潰れちゃうぜ」というようなことを実感できたというところは、やっぱり大きいんじゃないかなと思っています。

小学校教育活動検討委員として活動する中で、うまくいった面とそうでない面とがあったと思いますが、その両面について教えてください。

やっぱり学校というのは、教職員がその気になれば変えていける場所なんだなということが実感できたというところがとても大きいかなというふうに思っています。最初は、「行事の見直しなんていったって、できるのか」という思いがあったわけですが、アンケートをとったりだとか、実際にその行事を運営している部長さん方の声を確かめてみたリだとか、あるいは顧問校長さんのところへお話を伺いに行ったりして、その中で問題点だとか課題であるとかを整理していくことで、方向性が見えてきたんですね。「こういう方向にすすんでいけば、いい方向に行くんじゃないか」と。それが、「ああ、学校って変わっていきけるかも」「教職員、我々がその気になれば変えていくことができるんだな」ということを実感し、それを今回回答申という形で示すことができたというのは、私なりの成果かなと思っています。

課題ですが、やっぱり山積している問題はとても多い。A地区のみで解決できるということであればいいんですが、それだけではない。さらに県であるだとか、あるいは国であるだとか、そういったところにもつながっていくものも抱えているので、そこへどうアプローチしていったらいいのかということが、今この検討会の活動を一応の区切りにするとはいえ、残されちゃったなということを感じているところですね。

②（小6男児の保護者 40代男性へのインタビュー）

何かしら活躍できるチャンスを…

現在A地区は、1つの学校だけでやめる・やめないという判断ができない教育活動がいくつかあって、「それらを見直しますよ」ということを4月の段階で保護者の皆さんにはお伝えしてありますが、今率直に感じてもらっていることをお話しください。

水泳大会、陸上大会でいうと、体力面が自慢できる子とそうでない子もいる中で、やっぱり運動が得意な子というのは大会に出たいと思うだろうし、かといってやっぱり不得意な子は出たくないかもしれない。いろいろな子がいると思うけども、**出たいと思っている子のチャンスが無くなってしまうのは、ちょっとどうかな**と思います。

でも、不得意な子のことも考えてあげなきゃいけないし、先生方も大変だと思うので、**大会に代わるどの子も活躍できるようなチャンスをつくってあげられるといいのかな**と思います。

③（小5男児の保護者 40代女性へのインタビュー）

親としてはちょっと寂しいかなという部分も…

今A地区では小学校の教育活動を見直していますが、それを踏まえて率直に保護者の立場としてお感じになられていることを教えてください。

私の子どもは今小学校5年生なんですけど、経験したのは音楽発表会のみなんです。まだ水泳大会とか陸上大会とか図工書写作品審査会などというのは経験をしていないので、実際のところ、どれだけ大変かというのは、ちょっと分かってないです、正直。音楽発表会は、本当に保護者として、子どもたちのそういった発表会の場を見ることができて、すごくよかったなというのは感じています。

水泳とか陸上大会というのは、周りから聞く話ではやっぱり大変だという話は聞いています。なので、覚悟はしてたんですけど、「来年大変になるのかな」という思いではいました。

こういうのがなくなると、子どもは楽なのかなとは思うんですけど、親としてはちょっと寂しいかなという部分もありますね。でも、英語だったりプログラミングだったりというのが入ってくることを考えると、確かにそういった水泳大会、陸上大会というのは大変かなというのは思いますね。

いろいろな保護者の方から聞く「大変」というのは、練習が大変というような意味でしょうか。

本当に毎日遅くまでやって大変というのは聞きますね。水泳大会は、特に「6年生になったら大変だよ」という話を聞いていたので、もう本当に小さい時から、小学校に入ったぐらいから「スイミングに行かせないと」という感じでいました。「行かせた方がいいよ」という話も周りから聞いて、うちの子たちも1年生からはスイミングに通うようにして、水泳練習に向けてという感じですね。何か、**小学校の水泳の授業の時間が今減っているみたいなので、もう本当に自分でやっていかないといけないな**というのは感じていましたね。

今後A地区の教育や小学校で行われる教育活動がどうなっていくとよいか、ご意見いただければと思います。

そうですね。私のころの話になってしまうんですけど、何かこう地区全体でこういった大会をというのはあんまりなかったような記憶があるので、こういうのがあるんだということを初めて知って、ちょっと珍しいというか、静岡県内は他はそうなのかなはちょっと分からないんですけど、**すごく地区をあげてとりくんでいるんだなというのは感じました。**実際、水泳大会とか陸上大会も、子どもたちが大変かなとは思うんですけど、**そういうところで苦労している姿もちょっとは見たいなという気持ちもあって。**

あと、小学校自体での発表会だとか、いろんな行事が今減っている気がして、自分のころよりも。他の小学校のお母さんとかも言っていたのですが、小学校自体でやっている大会がどんどん減っているようなので、見られなくて寂しいというのもあるって、さらにこういう地区をあげての大会もなくなってしまうと、**みんなで協力して頑張る機会も減ってしまうと思うので、ちょっと残念かな**と思って。なので、もしこちらでなくなっても、それぞれの小学校で何か協力して頑張るとか励みになるとか、そういう活動があったらいいなというふうに思います。

④（教職員 40代男性へのインタビュー）

どんどん失われていってしまうものもある…、やっぱりそれじゃいかんわけで

A地区では教育協議会の諮問機関という位置づけで小学校教育活動検討委員会を立ち上げ、小学校の教育活動について検討を重ねています。それについて率直に感じられていることをお話しください。

水泳大会や陸上大会とかという、運動に関する課外活動を例にとると、その課外活動の指導を通して子どもたちの体力が向上までいかないにしても維持されてきたという事実はあるし、A地区でいうと、小学校から中学校に上がる子どもたちの泳力は、他の地区に比べても高いというのは、中学校の先生からも言っている。そういうやってきただけのよいことはあって、それを単純にやめましょとなると、じゃその今まで担保されてきた時間なり活動なり力なり、それらをどうすればいいのかというのがある。

教員の側でも、実際そういう指導をしていくことによって、体育の指導力とか、あとは他の先生方をお願いして、「分担してこれをやってください」とかいう経営をしていくこととか、そういったものが実際に各校にいる体育主任だけでなく、各学年の体育を担当する先生とか、若い先生とかが課外活動を通して経験できるので、先生方の本当に実質的な研修というか、実技的に実になっていたと思うんですよ。

それをやっぱりどこかでそういうことを培っていかなくちゃいけない。今まで自分がやってきたのでいうと、OJTとかいってね。「On-the-Job Training」か。何か時間をとるんじゃなくて、常にやっていきましょうというね。そういのをやってきたけれど、実際小学校の先生なんかは、やっぱり体育の授業をやるといっても、本当にその場に1人で、子どもを目の前にして授業していかなくちゃいけないところもあるし、先輩たちが周りにいて、時には授業も見せていただいていると思うんだけど、それだけで指導技術を高めていくには限界があるのかなと思う。

初任者研修なんかでは、ちゃんと研修の態勢を整えてくださっているんで、そこはありがたいなと思うところだけど、それだけで先生方の体育の指導力が上がっていくのは現実的には難しいかな。体育の話だけでなく、図工とか音楽とか、そういう技能教科もそうだし、作文指導なんかもそうだしね。今まで指導してきた時間をなくす。じゃ、その分何か改善、担保されていかないと、どんどん失われていってしまうものもあるなというね。それはだから、現場というか、直接子どもに携わる立場としては、やっぱりそれじゃいかんわけで。

確かにいろいろな課題がはらんでいることは事実ですが、これからの教育活動について考えていらっしゃることをお話しください。

指導要領が変わるということは、それは日本全体の実態とか傾向とか、流行とか受けて変わっていくわけだから、それは変わっていく指導要領に現場がどう合わせるというか、現場はそれに応じて改善していかなければいけないのは当然であって、そのうちの1つに教育活動の見直しもちろんあるんだけど、見直しというからは、プラスの部分を失わないようにしないとね。「こういうよさがあったんですよ」と。そこで担保されていたことはやっぱり残していかないと。よさを残すというか、その部分はちゃんと教員が意識として持っていかないと、「子どもたちがかわいそうだね」と思うかな。

⑤（教職員 30代女性へのインタビュー）

正直びっくりしたところがありました…

A地区では教育協議会の諮問機関という位置づけで小学校教育活動検討委員会を立ち上げ、小学校の教育活動について検討を重ねています。それについて率直に感じられていることをお話しください。

地区全体の教育活動に関わるということで、特に課外活動の継続ということについて検討していくという話を聞いた時に、正直びっくりしたところがありました。課外活動というのは、学校の中ですごく大きな活動でもあるし、たくさん時間を割いてやってきたことでもあるので、そこが今後なくなるかもしれないというのを聞いたときに、すごくびっくりしたんですけども、あの時間が他の教材研究なり普通の授業というものに向かう時間に充てられることになると、私たちとしてもゆとりが生まれるのかなというのを思いました。

ただ、そこに向けてすごく力を注いできた先生方もたくさんいらっしゃるし、子どもたちもそれによってすごく力をつけてきたというのも実感しているので、簡単にトップダウンで「やめます」と言われても、なかなか現場も、子どもを見てきている保護者としても、また子ども自身も納得いかないところがあると思うので、こういう組織で、いろんなところからの意見を入れながら検討していくというのは、とても画期的で素晴らしいことだなというふうに思っています。

今後に向けて期待していることや大事にしていかなければならないことなどについて、考えていらっしゃることをお話いただければと思います。

やはりいろんな立場からの意見を入れていくというのがすごく大切なことなのかなと思いますし、それを何ていうんですかね、ちゃんと周知しながらすすめていくというのが、やはり今後も大きな動きが出てくる場合に大切になるのかなと思っています。

⑥（教育協議会委員へのインタビュー）

夢やロマンを語りながら1年1年つないでいきたい

A地区には教育協議会があって、昨年度小学校教育活動検討委員会を立ち上げて、今検討をすすめています。まずは教育協議会について、どのようなお考えをおもちなのか伺いたと思います。

教育協議会があること自体がすばらしいなというふうに思っています。歴史をたどっていくと、A地区は地域的にも県下の中で一番広がったと思いますけれども、海辺の学校から山間部の学校まであり、山間部の学校には分校もあったし、教育環境がすごく違うということがありました。教育委員会も多く、教育施策の方でも思いの違う部分があって。だけどA地区の教育をどうしていくかということを考える場が必要だということで、教育協議会が立ち上げられたと私は聞いています。それが今も続けられているということがすごく大事なことで、やはりA地区の教育が1つになることが、教育効果を上げて、市町の教育施策にもよい影響を及ぼして、教員の思いが届く。それが一番の存在意義だし、価値だと思っています。

歴史を振り返ると、今話題になっている部活動ガイドラインについても、昭和53年ごろから話し合われていて、子どもたちの部活動に関する環境をどうしたらいいのか、それは健康面もあるし安全面もあって、A地区全体で取り決めて、1つの方向の中ですすめていこうとしていたんです。そして、その時から土日の扱いとかも含めて協議されていたということは、すごく大きなことだと思います。また、協議の場に教職員の代表も入っているだけでなく、今は市町教育委員会の教育長も参加する会になっているということが大きな価値かなと思っていて、すごく大きな可能性を秘めていると思っています。

トップダウンではなくて、教育をどうするかという、一番子どもたちに近いところからの意見を吸い上げていくことのできる会というのは、これから特に教育員会制度が変わっても、なお必要だなと思っているところです。

これからに向かって考えていらっしゃることを教えてください。

今一番思っているのは、二律背反の世界が広がっているなということです。学校現場での働き方改革については、特に重要な課題だと認識しています。

もう1つは、次期学習指導要領の完全実施も大事なことです。次期学習指導要領を完全実施するためには、それなりの時間が欲しくなります。時間が欲しくなると、やはり教育課程が窮屈になるし、働き方改革の上では難しいものが出てきます。その二律背反の中で次期学習指導要領を完全実施していく。そこにやっぱり知恵を絞るしかないかなというふうに思っています。

やはり教育というのは将来に夢がないとエネルギーが生まれてきませんので、全てのものを整理整頓して単純化していくこともいいわけですが、でも、その先に何があるのかというのは、みんなで夢を膨らませたいなというふうに思います。

働き方改革がすすむと、学校はどういうふうになるのか。次期学習指導要領が完全実施されると、どんな形の学校が生まれるのか。その夢に向かってすすんでいくし、将来に夢をもてる子どもたちを育成していきたいなというふうに思っているところです。

先人も「こういうふうになったらいいな」とか「こんなことが必要だな」と思って、今までA地区の教育を発展させてきたと思うので、これから5年後、10年後を見据えて教育を前にすすめ、50年後の様子も見れたらいいなと思います。「こんなA地区になったらいいな」「こんな学校にしていきたいな」ということを語りながら、みんなで1年1年つないでいけたらいいかなと思っています。

3 考察と提案

(1) 考察

「小学校教育活動検討委員として、率直に感じられることをお話してください」という問いに対して、「……このまま学習指導要領が下りてきたら、学校潰れちゃうぜということをこの委員会で実感できた」と委員が答えている。次期学習指導要領の完全実施が目前に迫り、実施に伴う学校現場への様々な要求や課題と、今の学校の状況を踏まえての発言であった。教職員の長時間勤務について、マスコミ等では「先生方の労働実態は異常な状況にある」と報じられており、この状況でさらに次期学習指導要領へ対応していくと学校はパンクしてしまうのではないかという切実な思いがあらう。教職員の長時間勤務を改善、縮減していくためには様々な課題やハードルがあるが、地区全体で行っている教育活動を全体で議論することは非常に大切ではないか。

検討委員会の議論についてどう思うかというインタビューに対し、40代の中堅教員は、「陸上大会のための課外活動（練習）を通して、子どもたちの体力はついてきた。…略…。先生方も、体育の指導技術を学んできたという事実がある。それを単純にやめて、担保もないと、どんどん失われていってしまう。それじゃいかんわけで…」と答えている。地区全体で行ってきた教育活動の実績とメリットを実感しているが故の思いであらう。運動の大会は、学校対抗的な色合いをもっており、先生方は子どもたちに少しでもよい成績をと願い一生懸命指導し、子どもたちも懸命に練習に励む。また、よりよい指導技術を求め先輩教員から学んだりする。こういうよさは、確かにあるように思う。40代の中堅教員の思いは傾聴に値する。

このような委員会を立ち上げ、広く意見を求め議論することに対し、30代の女性教員と委員（教員）は、「…略…こういう組織でいろいろなところから意見を取り入れながら検討していくことは画期的ですばらしいことだと思います」、「…略…教育をどうするかについてトップダウンではなく一番子どもに近いところから意見を吸いあげる会というのは必要だ」と答えている。子どもたちの教育に関わる様々な人が、考えや思いを交流し、みんなで議論することが大切であることがわかる。

今回の見直しに関わって、「今後について考えていることがあったら教えてください」という質問に対し、委員の一人は、「次期学習指導要領を完全実施するためには、それなりの時間が欲しくなります。時間が欲しくなると、教育課程が窮屈になるし、働き方改革のうえでは難しいことが出てきます。その二律背反の中で学習指導要領を実施していく。そこには、やっぱり知恵を絞るしかないと思います。」と答えている。これは、今の学校現場の現状に対する正直な思いではないだろうか。教員は、次期学習指導要領に向けてきちんと勉強して備えたい。そのためには、時間が必要で勉強に時間を使うと、長時間勤務に拍車がかかってしまうということである。この委員が指摘しているように、やはり知恵を出し合うことが求められる。その知恵は、分会内での忌憚のない話し合いから生まれるのではないだろうか。

(2) 提案

地区全体で伝統的に実施してきた教育活動は、子どもたちにとっても、教員にとっても有益であること、保護者の中には子どもたちの頑張る姿を見たい、無くなったら寂しいという思いを抱いている方がいること、次期学習指導要領実施を目前に学校現場は二律背反の思いで悩んでいること、そして押し寄せる様々な課題に向き合っていることに対し肯定的な評価が多いこと等が、教員や保護者の生の声を通して伺うことができた。

こういった声を踏まえ、次の3点を提案し、まとめとする。

- ・新たな学校教育を創造していくために、地区全体に関わる教育課題について、分会でも積極的かつ建設的に議論すること
- ・保護者、地域との合意形成の場を大切にすること
- ・これからの学校、学校教育に対する夢やロマンを大いに語りながら、教育をすすめていくこと

IV まとめ

今回の研究は、教職員の多忙や長時間勤務の改善、縮減をめざし、それぞれの地区や学校では業務改善をどうすすめているかということと、多忙な勤務の中でより効率的な研修や学びをどうすすめるかということについて、現場教職員の生の声を拾い上げ、教育課程編成の議論に生かしていただくことを目的としました。

事例として挙げた「家庭訪問を見直す」「2分の1成人式を考える」「地区全体で教育活動を見直す」は、それぞれの教育的効果を踏まえながら教職員の多忙や長時間勤務の改善、縮減をどうすすめるかというものです。「現場に合ったOJTとミニ研修を」「学級経営参考資料をめぐって」は、多忙な勤務の中で若手教員の育成（研修と学び）をどう効率的にすすめるかというものでした。

インタビューにお答えいただいた教職員の声から二つの言葉を切り取る形でお借りし、考察を加えまとめとします。

「このまま学習指導要領が学校に下りてきたら、学校は潰れちゃう」

学校では、1月から次年度の教育計画に向け、教育課程編成が始まります。その中心的課題は、2020年度から完全実施となる次期学習指導要領への準備と対応ではないかと思われます。

具体的には、「主体的・対話的で深い学び」「考えて議論する道徳」と言われている授業改善は、その代表ではないでしょうか。また、「外国語活動（小学校3・4年生）」「外国語科（小学校5・6年生）」の実施に伴う時数の確保があげられます。次期学習指導要領への準備と対応は、学校としてやらなくてはならないことであり、管理職をはじめとして教職員は、一丸となって真摯にとりくんでいることと思います。

一方、ここ数年、教職員の長時間勤務が大きな問題となっており、これは喫緊の課題と言えます。地区全体の教育活動について地区として検討委員会を立ち上げ、見直し・改善をすすめた地区の事例の中の、委員の声が印象に残っています。「このまま学校に学習指導要領が下りてきたら、学校は潰れちゃう」という声です。この委員は、次期学習指導要領について勉強し、実施後の学校の姿について一定のイメージをもつことができたようですが、今の学校が抱える問題を考えると、過密な教育課程の編成、子どもたちへの負担増、教職員の長時間勤務の増大化などがさらにすすみ、「このままじゃ学校は潰れてしまう」という思いをもったのではないのでしょうか。

「二律背反のなかで学習指導要領を実施していく」

もう一つ、私たち研究メンバーの興味と関心をひいた声がありました。

それは、二律背反という言葉を使ってインタビューに答えてくださった教員の声です。「…略…。次期学習指導要領を完全実施するためには、それなりの時間が欲しくなります。時間が欲しくなると、教育課程は窮屈になるし、働き方改革の上では難しいものが出てきます。その二律背反のなかで学習指導要領を実施していく。…略…。」です。教員として、学びたい、学ばなくてはならないという思いをもちながら、今の状況で学ぶ時間をつくると、それは長時間勤務の増大を招いてしまうという、まさに二律背反の狭間にあることを語ってくれたものでした。教育課程編成では、この二律背反にどう折り合いをつけるかが議論の中心になるとされます。

今回の研究で、所員が調査をした教育活動についても、教職員は忌憚のない正直な思いや考えを出し合って見直し・改善をすすめたことを伺い知ることができましたが、それらの思いや考えを整理すると、二律背反がはっきりと見えてきました。

要約して図にしますと次のようにまとめられます。

次期学習指導要領への準備と対応	
	勉強したい、勉強しなくては…
	時間がない。長時間勤務がさらに増大してしまう
家庭訪問、2分の1成人式	
	教育的効果は大きい、無くしたら本当に困るの・困らないの
	詳細な計画づくり、実際の仕事の負担増
地区の教育活動	
	伝統的にやってきたし、子どもたちも先生たちも得たものは大きい
	多忙な状況、練習等の負担、学習指導要領への対応

教育的効果は何か、仕事の負担はどうか、伝統的・慣習的に行なわれてきたことをどうとらえるか、保護者の願いや思いをどう考えるかなど、議論を重ねれば重ねるほどに、結論を出すことの難しさを感じます。二律背反では収まらず、三律、四律背反となってしまうでしょう。

ただ、私たちは、長時間勤務の実態、次期学習指導要領への対応、これからの学校の姿等を視野に入れながら、学校の姿、教職員の働き方を変えていかなくてならないと思います。先ほど、学校は潰れちゃうという声を紹介しましたが、学校は潰れるわけにはいきません。教職員みんなで、議論を重ね、知恵を出し合い、周りの理解や協力を得ながら学校と私たち自身を変えていくことが求められます。



調査研究委員会（2017～2018年度）

共同研究者

荻野 達史（静岡大学人文社会科学部教授） 2017～2018

所 員

濱田 晃治（田方支部） 2017～2018

中田健太郎（東豆支部） 2017

末吉 浩嗣（東豆支部） 2018

唐國 友芳（富士支部） 2017～2018

橋本 哲（榛原支部） 2017～2018

白井 克宏（小笠支部） 2017

八木 秀樹（小笠支部） 2018

加藤 仁敏（磐周支部） 2017～2018

事務局

大石 茂生 2017～2018

小野 佳貴 2017～2018

舘 一徹 2017

赤堀 真人 2018

学校における業務改善の見直し・改善のヒント集

編集・発行／静岡県教職員組合立教育研究所「調査研究委員会」

〒420-0856 静岡市葵区駿府町1番12号 静岡県教育会館3階

発行者／教育研究所運営委員長 鈴木伸昭

発行日／2019年1月

私たち教育事業団体は みなさまのサポーターです



一般財団法人 静岡県教職員互助組合

65th



健康支援

保健事業
生活習慣病健診
婦人科検診
脳ドック補助 等

経済支援

給付事業
療養費 家族療養費
出産手当金 等

貸付事業

住宅資金(年利:1.00%)
(団体信用生命保険料込)

(年利:1.30%)
生活資金 結婚資金
生活福祉資金 奨学資金
オートローン 教育資金

生きがい支援

厚生・文化事業
歌舞伎鑑賞・正倉院展 等
相談事業
結婚相談・相談センター
公益事業
学校巡回公演
舞台芸術公演

互助割

をご利用ください!

静岡市葵区駿府町 1-12 静岡県教育会館 2F TEL:054-254-3626
互助組合ホームページへは、[「ごじょう丸」](#)で検索



静岡県教職員生活協同組合

「夢ある暮らしのお手伝い」

教職員生協は、県内の公立・私立の保/幼/小/中/高/特支/大学(静岡大学を除く)の教職員を組合員に、下記事業等を行っている職域生協です。

・チラシ・カタログ
・各種保険事業
・一人一品利用運動

・指定店事業
・大丸松坂屋
・ハウジング事業

・マイページ
・JCB
・教育文化事業
(教育研究助成)

・ガソリン供給



静岡市駿河区登呂 6-14-27 TEL 054-282-2140

教職員生協ホームページ [教職員生協](#) 検索



一般社団法人 静岡県出版文化会

ご存じですか? 出文の教育支援

—主催事業・共催・後援事業—

- ICT活用研修 研修費無料・交通費支給
- ICT講師派遣 経費無料
- 児童生徒紙上美術展・推奨作品貸出し
- 教育講演会講師紹介・助成
- 高校生文芸作品コンクール
- 新組合員教室(全地区(支部)開催) 経費支援
- 中学生英語話し方能力研究大会 カップ・原稿集の提供
- 県読書感想文・感想画コンクール 賞・盾の提供
- 高校生読書感想文・感想画コンクール 賞・盾の提供



静岡市葵区駿府町 1-12 静岡県教育会館 3F TEL 054-255-4451
URL <http://www.syutubun.com/>

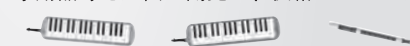


静岡県学校生活協同組合連合会

安心・安全な教材教具を通して
学生協は子どもの未来を支えます。



静岡県内の13地区学生協と連携して
学用品等を企画・開発し、供給しています。



静岡市駿河区登呂 6-14-27 TEL 054-282-2166

URL <http://www.kyousyokuin-seikyo.com/link/rengoukai/>



株式会社 静岡教育出版社

静岡県の子どもに

『静岡県産』の教材を!!

ニーズ **子どもの学びを支える教材づくり**
信頼 **環境・体にやさしい教材づくり**
新鮮な感覚

三つの理念

1. 教育界に奉仕する
2. 経営の合理化を追求する
3. 健康的で明るい職場づくり

三つの約束

1. 子どもにとって価値ある図書教材を創り続けます
2. 学校現場の先生方の願いや要望を形にします
3. 当日出荷、翌日着荷のお届けを目指します

●教育文化事業●

公益信託アール静岡教育振興基金
教育活動の充実や中堅・若手教員育成への支援・助成
(平成30年度実績 20名 約100万円の助成)

静岡市駿河区曲金 5-5-38 TEL 054-281-8870
URL <http://www.shizedpu.co.jp/>



公益財団法人 日本教育公務員弘済会静岡支部

児童生徒・保護者・教育関係者を支援しています!

教育振興事業の奨学事業(奨学金貸与・奨学金給付)、教育研究助成事業(教育活動奨励・研修補助・教育研究実践論文募集等)、教育文化事業(PTA活動助成等)により静岡県の教育振興に寄与しています。

また、教弘会員である教育関係者の皆様への福祉事業(祝金・記念品等の贈呈、宿泊補助、人間ドック受診補助等)の充実に努め、暮らしに潤いをお届けしています。

これらの事業は、生涯の安心をお届けする共済事業(提携保険事業)として実施している教弘保険の契約者配当金を財源とし、明日を担う子どもたちのための教育の充実と発展を支援しています。



静岡市葵区駿府町 1-12 静岡県教育会館 4F TEL 054-205-5130

MEMO

<http://www.stu.jp/>

最後までお読みいただきありがとうございました。この所報をお読みになったご意見・ご感想をお聞かせください。皆さんからいただいたご意見・ご感想は、今後の研究活動や成果発信に生かします。

STU Institute of Educational Research
静岡県教職員組合立教育研究所

FAX: 054-255-5110

Mail: sier@stu.or.jp (ご意見専用研究所メールアドレス)